枇杷園七部集三編

へ 5
4631
3

松の炭　琵琶袋　まつの硯　玉くしけ
三日月　名なし香　木瓜つくし

枇杷園七部集三編

尾陽
東壁堂藏

4631

松の炭の序

大白か詩ハ不用意をもて古ま残得たり今古の八巣亘人かこの集を編る游芽生のあきくしゑさをく分入ますなもなし思ふさを書閑をみきて　かきくらしたるミすり西新意のうきき

昭和十六年一月十一日
尾野實英氏寄贈

門 へ 5
號 4631
巻 3

乃能ひかりけりさしそめて春
何も南もすこし帝也し
と黎を晴れそつも又
其のもしかしや去く乐
江山風光の数を尽さる八
何れもおよぶ
津実書

朱樹叟
士朗

松露庵

ふる猿松ハむかしなりけり鶴の声　蕉雨
早苗の水を渡る菴の戸　岱青
蓮葉とく小蓑の露のちりもせて　士朗
晴て来たる山をならべる　素外
月杖の屏風ねさへて掃はれ　壺伯
きりもをさぬ玉虫の箱　岳輅
松風も新宿の海苔人るかな　桂五
石の箱漢ま橋りける沙清　駛六
柿の実をとられて居しものかん　臥央

鶯のこゑこの切らぬ埋火　白圖
御題を吟じ出けり明方に　少汝
忽ちを掛しぬ梅が三年　雨
さんしよはやはらかしきに鰹哉　青
命下のちぎりきりしきもぬ　朗
拝みけり闇をもてなす名月　外
豆腐の味のこゑかはりけり　伯
蔵山の新茶に数軒の茶　洛
圓を病人の筆の芽をとる　五
春風を留守たしかなる小林哉　六
いつもすれは唯ハ山の色　汝

りんハいつこのふ蛙鶴まて　圖
璞花を擬きる襲を忘れ　央
雲の後の雪の種を生し清く　雨
かのうらみの中にあれの額　青
くつろ遠くの枕濯の久しさ　朗
継の先研音のさくし　外
廿日余り醫師の家にも寒　伯
濡といひ出し新涼の秋　洛
飛虎のあはれに麓に女郎花　方明
菊のかり梁の蜘る鬼梢　圖
和の名を記せの津毛ハ西の京　外

狭将ゟ毛渡く守たる男りんまよる　朗

胡簶（ヤナグヒ）も半色の衣に周つゝ　路

日うけの庭さき岩の崩く　雨

咲花の匂ふ高まさる八重霞　青

馬刀（テ）貝拾ひにも今朝乃るて　明

蕉雨　四　騏六　二句　岱青　四句

卧央　二、士朗　四、白図　三、

素外　四、少汝　二、壷伯　三、

方明　二、岳輅　四、桂五　二、

夏

ちんく雨まうつりておとしきれ　洛　蘭更

花の盛に似もやり葉ざくらの朝ゐる　、其成

一声に関はさけたりねくきれ　壷伯

夏なハたゞ芸井をより身ぞ妙　三川　入素

咲姿子の花の庭すて一字ふ　素檗

七夕の空よまうて待る道徳

ゐとふもて見ず

ほろくとりんまのまれゑの四月ふ　入り　卧央

卯の花や河内よひの朝ぼらけ　李三

誰も来ぬ志の夕暮の牡丹かな　ヲハリ 木人

竹の子や小関を出抜る人の人　、尼 壽松

蛤も子紙のつゐかさくて来るを　柵莊

風の浮かる柳にかゝるみだれけり　奐之

来るもゐなりこそ猿ハ見えぬ黒部哉　イヨ 標堂

信中

帷子に白雲かゝる山路かな　ヲハリ 書外

菊葉や菊にとまりたる三日の月　一之

舟とりの晴わたりや三井の鐘　ヲハリ 眉光

一白井手へ入んと志海に夕鳥の

登門草句なくハ入居をかく佳く

あらきハ

夕顔の閑をとらへハ都とききな　ヲハリ 岳洛

父や子や露押分て行楠舟　、菊溪

芹深や又浪高き岩のうへ　知足

うき草の住見えハ高みをきし家　ヲハリ 桂五

かしましくかり九く出来たる黄の嘴かな　、储青

みちのくに見えのとゆ

松鳴やすゞ鳴ハ世にまくも哉　イセ 青阿

秋

萬代や山のうへよりけふの月　士朗

名月や家やして傾きものもなし　蕉雨

月御せしに中秋の空ハ雨も
何も名月に思ふ雲の来にいぬる
閑ハ芭蕉をとし礎のをむかし
忘れぬかさこそするよ寂さん
ふかき夜ハ古鏡のさ海いまし
むつかしけかなも

不破の月あれば雲なし夕かな　ヲハリ　方明

旅の月長きむかしの命かな　仙タイ　白居

秋まつや生死をかまで草枕　アハツ　重厚

紀ゑの山寺に仮寐しける
きくの枕あたゝまりて雛もなんて忘れさ　ヲハリ　紀鳳

蕣は中々ふやさしし小家かな　ヲハリ　帯棋

一葉ちりたるあきさゝぬ芋の葉に　素兄

閑さはぬるきよりそ花ちくさ　イセ　椿堂

花のまま日数経よりぬ女郎花　ヲハリ　啓甫

簑むしの簑をうらいや露の秋　楚材

桜の葉かりわしも散りかかり　忍阿

草菴
朝寐しらす秋を弱さや蟋蟀　ヲハリ　羅城

落あまりし日向ありて芭蕉葉へ　秋田　五明

秋のなごりあき風に吹こされけり　伯先

蜻蛉や何やら乗て山廻り　（ヲハリ）蛙聞

稲妻のけはしくかゝる枯枝かな　（洛）丈左

角力とりやわかれて力たゝしく　（ヲハリ）木吾

鹿鳴て懐に入るあらしかな　兆如

引こる竹の中より小夜砧　石馬

雄鶏や廿日あまりの月の秋　倚凡

不二見ゆる新日隠す杉の紅葉かな　菊貫

立さかり鴫のあとに見渡りけり　（三川）卓池

菜畑や枝にとまりて鴫の声　（カイ）可都里

冬

行時雨雲の間ハまたゝきらく
拄杖の藤葉をとりるてるや　（江戸）成美

時雨しきりよきき窓より外の月　（ヲハリ）墨山

冬のうき晴よりかゝるしくれかな　（刈谷）非入

花もはや晴にをく草の一時雨　（ヲハリ）白圀

冬の日の長つ茶に登るあらしかな　（弁之）双鳥

冬すゝ花咲つく枝もありけりや　（ヲハリ）兆雲

家ねむと芭蕉植にまた冬籠　、大皐

冬ごもりて手拭ひろふ枯野かな　、青霞

生海鼠とも浪のうきりに入りけり　、大魚

こがらしや菜の葉に包む鴨の足　、騏六

鴨番ひ同しとしてなくなり　雲帯

暮柿らし日和て落葉に鴨の声　ヲハリ方朔

かれ芝芦や浪ハよせて返す十丁よ　、竹有

木からしや象の眼の粒丸し　、物我

ふゆもやとく菜なこほうして家族けり　梅好

初雪やわけもなしに草の上　八州玉屑

精進て霜月の檐まくし旅寐けり　星巴

あさもふらしに雪見えそめて明けにけり　如毛

初雪や小笹かもとの雪の嵩　ヲハリ徐英

雪の日や旅くれ家のの鴨の足　三川桃生

薪たくき雑ふりて茶話なり　壷伯

春

家の戸に巻きし与もる花かな　浮戸道彦

あさふふしとにふれて桜によかけけり　ヲハリ延至

魚荒く争切花の流るかな　凬子

ものくよやもの的花ようつりけり　ヲハリ昆明

有酒但須飲

花に寐くさ宮と起きにけり　左皓

白梅にあかり白河は人も来ぬ　十六　升六

梅咲くや押鉛干す山家より
月をみたれば　ヲハリ　艸人

菴の戸や月の中より梅の花
梅をたれは　蕉雨

上臈の膝のうへまで月と梅　可紅

鶯やおとろふ雨に落ちけん　鶯岡

一節も書をのこさぬ柳かな　洛　月居

人の柳うらやましくも猶なかり　サガミ　長翠

柳見てより人なるゝは簑かさん　江戸　宗讃

接木苗か根よりうゑてり春の日　大津　騏道

梅の戸や琵琶の音好む朧月　菊磨

小山田や蛙まかゝ猶多ゝふり　千葉

高く飛て蝶の風情のみえぬ哉　ヨシノ　可翠

家心雨ふる春なすてあらなり　山皐

竹庵のこまかに霞く住居なり　洛　百池

象にふるまてられし淡雪といふ名かな
洛の庵水からこしみて　非洲　五芳

永キ日や縫稲やとて書ハ切　ヲハリ　少汝

光琳か手會噂や古團扇　士朗
蚊帳に凉る鴨川の月　蕉雨
笹根まつ道の隈く〳〵宿かりて　壺伯
多藝の座にたま〳〵新まろ柳　朗
うつくしき齢を人の負ふらん　雨
鞨鼓の音の止むときもなし　伯
峯くハあけぼのの雲吹合を　朗
柳の引き末ハ水にかゝり　雨
塩亭の壺に一枝さして　伯
手の立つ計り蕗味噌を焼　朗
あきし出る目出し謡をくせる也　雨

今の間に来てふえる山雀　伯
刀さすき光来も床のあはれなる　朗
欟作る藥鑵のをともしる　雨
清々の音の雪交る冬の夜を明て　伯
魚も淵に移る老てら浪　朗
亡骸の縁とやふすまて恨之去や　雨
落葉の零を揺る樹半　伯
関越す山路も年の暮ゆれハ　朗
ゆとらまてに松籟御湯を仕出して　雨
文字清ら法の言葉ハ子なりけり　伯
結ん言葉やんちうら陀の童　朗

水の上もさ夜霧なり隅田川　雨
能役者人に素見ゆるゝ治　伯
あやうしの額つくろふ古画　朗
売り付をまだ板金の文　雨
一押に去明夜鼓稲の茶　伯
薮の衾まうきゆかれしころ茅　朗
絆を咫尺の霧まかんらしなれ　雨
いへ出をたやまひと耳ふかしの山　伯
出つるもし合こそ押へ松の葉を　朗
とくくありてハ宿くさのあさも　雨
おろしと身をもち歩り嫗の声　伯

垣根のうちへ下駄を掃あむ　朗
梅でも菫でもなしと胡の茶　雨
この出月とおもをかしき　伯

士朗　十二句
蕉雨　十二句
壺伯　十二句

増賀ハ信を興し西行ハ須磨を
志たひ来れる蕉翁の其蹟ハ
まこと蕉庵の道に揚ゆしたり
枇杷園に秘蔵し来り西宮の
人義翁も読りかへしと叙さるも
なりける経ことし所得の秘笈の
蕉翁此園中に遊ひ来るなり

聚徒りけしをも合せ清く濯くし
おほね径追ひ来れるに焼き去るの
所は海を追ふ人の時雨の音をきゝ
ぬまをも松風に上言を承知しをひけハ
まなつれからず縁に触して
なりさて来る夜をそ出らりけり
然青

さひ浮るゝ三ツあり夏の月
士朗

山もむかしの初わしゝきす　蕉雨
高らき萬橋車かまへて　闌更
一むら竹の搖ふ嬉し　大阜
紙きぬの袂に破れ勘弁け　卧央
煤掃らける人をはやらん　壷伯
降ゝ雪に蔦の枯蔓引むすひ　駄六
額のうろき犬ら飛出まれ　方明
乙の字も名店の鏈にかけられて　桂五
十の小袖をあらむ廣蓋　延至
まもりと出ぬ秘を吹せ松の風　昆明
鳥八ことの惜きたしめやし　素外

たらくと霜朝の堤に人出て　少汝
垣隣ひ已に井の錦なり　徐英
蝸牛の角ふりまひし横く麻　盛青
競ふり見をまとい花の木かくし　岳格
かゝ拝殿いつこの湊に（舟をとよせん）　白圀
手をとに海苔をすらふ破浪　竹有

八巣　蕉雨選

難波津之呂庵

紀をとゝめて金陸花雲より常に

音しよきの縦田にうるさき家風（清談）

ゆかしき雛僧の楼に屈を残せん

亀の尾しれ志まるにあるしの屋に味ち

散る花しこ筆ににむかれしハ純の

路と山翁よいさ顔後なるまぬ人て　拈

[illegible]

さるかけなりける古哥好るところも芭蕉の花の似ものひるあに在集にもし実の無法師といやしきは景有る稀なことを家多み虚空無罣礙の其うくし城形りて深けれとゝもあれなりとも呼つるを枇杷葉の動き形よ於ゐひゐる集ゐ名れハよそ出さし法ことに名と号くるなりん

謝らいふくる家なりとしにめる月ころの明年法と別なる義良家か意深し歌なりとハあるけし遣る米や道信卿の言葉ふ想ふの如くと書くるふぬえ岩の本情萬葉集法師への如るに先の有なくに浮花ふらく本山の月かを深きしと識出えめる士朗若く義良

ゆましく蚕を経しも営み織るふとよき
宜しく養蚕稼業すし村々家は業とし
日光の山さしと住る前のよしはいたすよ
加之宇都宮の畜所我存し麁をと
養ひ出るしもよ乾は陸宮人家きとり
播さる人是へ其他の流に拘つきられ
歌舞しもく手曲あやつる者きを芸稼ら

岩手拝し若狭の本郷をさるへきと
世のる所に拵へんとしいける勝土朋吹い
熊谷の由来あへし事ある可何の寺と経るは心
有ると見てふとの奏の名器をし伝ふる
勤ひふいあるもりい家い前や高麗海運る
山の尊を是まさうしひを恐ねらら立れ
猿猴の田井子相りあゝて相せり哉

猶んふとしあら経この今の師ひあるは
いろは名のしらぬやよりよのへし枇杷
芭蕉の花實をうらひ葉をうつ
匂ひきこゆるまうの白梅んとするは
たゞ花はふるきを皆気ゝ盾し
とゝろし郷ちの停をこふ
文化四歳丁卯正月晋窓巣兆筆

歌仙行

書初や月の湯ながれ出る心有　茂良
花のむしろをたゝみ寄せ箸　士朗
雛子啼く篠竹を末は糸を解く　仝
飛とすはかり水のあふるゝき　茂良
いつらよりも戸板を雨に横にかれ　仝
さらさらしと鈴風ふ吹　士朗
秋雪の三井まこよしも弟を絶　仝
やさしき勝をはめる居来華　茂良
藻塩焼くやくふるゝ寒さ秋の　士朗
小松りし雑煮の出ゝる　茂良

秋深く堰の法度をまもりおき　士朗
菊菊となつ深し壁の無縁　仝
やくさきゆるしきれや猿の思ひね　茂良
なき卿のおもひは軍かすむく　仝
長刀の身のほどしらぬ急ぐいかゝ　士朗
あやなく袴をもすふ橋枕　仝
松の根のおかしつらなくも附る　茂良
稲妻のさしひの入相を鳴る　仝
二三日寝ても不来のか通るなり　士朗
箸柱をしすけし湯口ちかみる　茂良
総みなかに白黒の緒をたるべし　士朗

かなしき事を繁くいつもあふ　茂良
一流らし瀬踊流たる草の花　士朗
なかの霧茂原にかゝるらふひす　茂良
この鬼もきれめしきさうす権　仝
要栗附たなる鳥羽の西堀　士朗
あとくへの主殿へし宿にひとまかせ　茂良
あまかつ曲さハ尺之鉢有りけりも　士朗
棚の茶ふよつらのきと疑し鏡の生　茂良
秋の鐘の聲きこみ来る　士朗
江戸人も百千の仏の面影の　茂良
茶鍋をたてく宗清の山を　仝

もろ消る雪も表手に驚きぬ　士朗

汐のさしつまハ麦しらずなる　仝

咲花に清液の池やなからん　茂良

面といふまだ芽たる葉し　士朗

春

此和子今の松もちとせの始　在貫

若菜のからか伊勢とも吉野雪消て　嘉渕

都をおもしの春にゆかひたと

此すさこそ

貫之の家跡残て梅の花　士朗

鶯の影よりけさハかすれけり　雲帯

三日月をひき上りけり梅の宿　米彦

鶯の方を思ふ夜や軒の月　五趙

出つとして隠ることなし梅の花　あ喜ん

鶯ハ鳴とも月ハ山のうへ　岳格

春さ人に鍬入れ地也梅の花　荷屋

鶯にさそれし家春ハ暮かゝり　月居

梅の花老たる木にハなりかゝり　武城

うぐひ飛まての声にのりけり草籠かな　石雄里

宿とるハ京よりなん西の柳かな　秋挙

猿引と並て見る小橋の角　魚心
やふ入の子ゆへに朝を惜む哉　若夢
それ〱の山出かゝる朝霞　大莖
うち津けに菜の上の春日哉　漫々
袖手や歌を詠ゝしの山の本　李杏
芦の芽ハ隣くも露ほとり　干當
鳴きそのうすき帆や中の川　迂春
雁ちまらうつる梢よく見えハ晴のけ　梅間
筆の戸や芒来の花うつる鏡の貝　双鳥
桃の花月の出雲にかゝりけり　升六
いつくれし雨の上の春の月　蒼虬

市中ハなとも花の霞の月　可省
雁俵うし能絵とあらぬハ松の名の月　梅價
宗祇つらかし庵の丸ぬちの伝へし山　交山
かりそめに知へる山のやくそて
住よしやとはへ松もひとつ老ハ
花の春にむすひかけたる蓬莱か　士朗
花に出てわきへ人の佛かな　松兄
とみにくる月を〻くり山けふり　茂良
出てかへるもけふといふまてを花の君　素檗
花見
うつむく娘にすりとる櫻かな　雪雄

花なくハ春のことなる西東北　土卯

梅咲く盛なかきおもろうか　大蘇

うかゝ人の志り良まして尋ぬるか
うからすかぬるなしひありとハ
とき後和尚のよみ玉ふとうや
業平の君もきのふけふとハおもひ
さりけむとなりて侍してわすれ
さしもきの身を

志ぬぬよそよそれいろぬる山桜　洪六

如月の風松をおさへてびく　風全

涅槃の日螺ふく家も霞貝　長斎

あら海の風よ胸うつ陸ら鳥　春坡

野ハ若けなみあへて総し春の花　和京

春風や花雛の見くつする東なる　五道

鞠ふる山家さもて白く咲なる　猪来

よ子き綾まをしたる蘚賈　寿川

枝の先すことうそすれ鳴雲雀　木海

むらう燕浮草なしいか池の上　玉洋

こしかたの花な見つよ空のかな　国水

菜の花や桜おかけるかす　雉巳

永き日や打ちえひ志られし橋の下　白年

夏

あかつきの梅をふくらす嵐哉　千影
更衣いくや二日の雲のゝの朝　岱呂
更衣既にありたき日なりけり　雄淵
うきうきともなく青紙ぬる子都ん　嵐外
わかくきれたのか初みと紙鳶　素檗
桃市に津まきしてもわらきに　五芳
櫻木の花八出来けり時鳥　田翠
たゝかまつて西にかゝふく紫が　菊二
うつくしき衣着て出る簾子が　凡十
見るく居まつく月のかきつばた　喜年
いとすゝめる鶏や牡丹の砂の上　五来

萍の花咲て小波のつきま　蕉雨
夏の朝をうしろふしたる若葉が　士川
芸の中よき家見ゆる四月が　宇洋
縁に結ふ竃に浴ふ價はなし　蝸園
鴨の子の親まちてそらす小歌が　芳之
初給ふかハ身に屠る茂姫か　巍道
茅山の中も継兄の姥を子が　樂只
色まれハ二番子なるらぬ夜半雨　園叟
神ともに落ちと振ふ玉蝉が　午心
は樹山神戸にきらすて　
夜蔀の曲りかいりしや宮の五二　大節

たなばたや空を縁にねころぶ　一草
夕白にはや峰の東に見へにけり　斗文
身くゝにかくへぬきし猫はあふきかな　五明
松かさの落ちし音せし苔の露　曰人
さらしくも来ぬ八重にかゝり苔の花　女 まちか
水鶏なくや幕をしひらく夜雛け　東陽
此風の萩まきゆくてもふれとり　居然
萩よりも藻屑吹寄るあらしかな　六来
卯の花をくふも巻こむ嵐哉　菊好
鳥に鳴く音も多かる夜りかな　完来
草からうけし面白藪子かな　鹿古

朝がほの纏ひまとひたる柱かな　如毛
とくだみや夜の梅しく花白し　篤外
蜜蝶やあまたに飛し夜の衣　管鳥
椎の葉や雨かゝりし十五夜蛍　桐栖
うつきや銭張に見ゆる桃の影　木桑
萩の尾に見し萩の月からぬり　去泉
夕雲もたゝずみの櫓情が　白黛
桁も七くもぬれし蝶に河しが　三津人
雲洞むとまり鳥なくし葉はなし　羅彭
夕録に書かけ杵のすゞしさか　魯隠

四条納涼

られくりし山路ハこそ夕すゞし　河洲
まさき草我ふひろしりぬ夕涼　眉山
物縫りして蓮を淡めたり　祥禾
雀子の餅よこしつゝや仏生会　有圭
菊壇盃の口ゆ花ふさよ菊なり　昭峯
入相もゑとく夜来て西日ふ　春人
さらたまや見尽する都の雲のきれ　趙村
よき玉へまつて月つたむ枕かな　我鳶雪
鶉つかひの面洗ひひたし水の上　鷺九
出揃ふてくとれも乗の数鶉舟か　岱李
鶉ののきは二十日の月の雲かな　月巣
鶉のこゑに月ハ出まり長良山　可堂
窓ひらき僧ハ出でけり紫苑にふ　之芳
足白ハかりなたる女きふ　亜渓
昔二寸かんなを削り野り　李芳
杉なく蛛の巣の蛉まする厠ふ　蜂友
涼しくと人に逢まぬ暑さふ　可都里
夕立を避けて雁鳴の名残か　東大
蓮の実鶉むかしに啼雀　可篆
清水ふむ家見へるかぬ松のかげ　葵亭
夜の海一浦つくの夜しかしかな　桃里
山里ハ鳥ふふもはも清水かな　霞堞

麻刈の跡うしく来る戸口が　来紀
雲送り祢の小田よりたしめ竜　青橘
出宿虫十夜ぬ秋来ぬと思ハす　砂童
山本っこそよそ青田ア峰の雲　月居
夕ちかすしの花の五細後や蟾声　茂良

秋

玉虫の玉磨きやうる細の枝　百池
星あひや一夜借えの笹枕　卧央
なきさほる人の拙いふけ見るうか　支国
鼻来めハそよし動く小荻が　墨樵
筏引う?るゝ峰なきの水　春蟻

人のまく山蕾つ田の細の露　召卯
秋の日まなかき日も浮る鷄の声　田禾
女郎花草のこゝろを余所にさき　丘高
黙すまハ軟しくなりぬきかす　巣居
蝉や緑のうへ中て帰る来る　稲杞
秋来ぬと驚くも秋のころ川　少汝
人とハ何と答へん糸一紫　存古
来る露は網のかゝる行指が　葛三
草の雨ちるぬやつハあるうきれ　竹有
白（甘斎）秋の山ぞなしやさな咲るなり　烏扇
今津ゆしき草来もよしよす萱　魯縞

天川に月ながるゝ湯浅の秋　霞潮
安しさ江やとこの枯も薄の中　鳴雄
侘しさはいつも居らす秋の風　文左
賤が家の萩も尾花も秋のさま　一透
川霧やたきおろしたる坂の上　柳荘
糸籟によそふく田毛紀月夜かな　蘇明
名月や浮足ぬらす苔清水　五雄
三井寺の鐘見えて居るや勇夜哉　烏吹
汁鍋のうつす名日やけさの花　栢翠
風の音いつかたよりに鮎寄せり　桂五
似る人を我家に宿して

このまゝに居てこそ森よ雲の露　有国
あさ萩をとて聞しきるゝのつれ　雪雄
女八宮方や背戸中にて扉る半の夢　季謐
日の暮ても萩は今こそ秋の名残　若翁
鳴子鳴りしてかんとれは霧のうち　凡頃
静くとたらぬ思ひはきやしを秋の暮　黄山
月の出るくたしかに鴫も秋の燈　甫立
大原やをしはてゝとの秋の
白露をてなつかれもし峠もとりや
とふ八々る日の出ふへ
宿られは康うあれるゝ中大寺り　月居

簾まで明く白つきいる程に　茂良
雨縁の菊人をあふして枯ひたり　布舟
白菊や香ハ中しくよささうき　空雅
菊ハ霜のとちるハたりとしや
揃ふ縁みえさき折ふし
来雁もかんるとやすらむ菊の露　成美
見るとよみし縁のやこや後の月　呉山
后の月枝を離ましまのし新　芦本
松風を帯るてたる菊のか　祺道
狸菊のたましもきすしきこふ　乃国
松ハ萩すしきをなるや山の菊　素彦

好枝やゆかまで出る山の雲　武陵
多冬
菊るの小白つん虫を神しられ　羅城
附菊すとつんまハ忘れの素衣　野秀
初霜や枯らしもの後ゝ枝の白　麦阿
かんくめ露ハ落しそれて田の穂　乙寉
とはりと早鶉中のあにあふ
折さて落のちりて簾より
はかく今もほし落の秋上芋
こゝをさや来つもめゝきい事子
中秋くる

うすし燈に塗本蒔絵の附文字　士朗

あさ寐して花ハ冬の柳もされし　尺艾

冬のうくひす郷り雪の声　キ英

むさし野を越るまうて

和泉の菓子や鵜飼ハ菓来　巣兆

薪たをひるも焦るゝ枯尾花　瑞兮

きのふ見し縄ふも荷りす枯を哉　岳輅

霜枯まて

初雪ハ寒根からも立ち鳥が　椿堂

長閑なる日から冴えハ冬と越し　卓池

冬の夜や瀬田の長橋ぬらしけり　大江丸

炭竈くミ重ハ鳴すりさきぬ　方和

ふるのの松淋しくもなき衰也　雨塘

冬の夜や横切られし鳥の影　方明

水鳥のうしろ中りにけり夢の中　文鳳

風吹ハ鶴こそ男ふ冬木かな　女 せ之玉

小春ハ空月夜も良いなりけり　栽鳥

ふつくと冬鳥隠さぬ山かな　紫金

稲かふの操ハぬ冬の日和かな　魚堂

みな冬来るまでの蔵出かな　瓜坊

家なりと空も寒しや山の影　乙二

冬枯のかくも返る冬の日なりけら　樗堂

入あひの鐘にと読ける古歌も
山の寺の桜ともの落葉し
ちりけるを

世の中はさらでもさびし夕雲　祐昌

寐ほしくなる菜の花の[illegible]　芝叔

桐火桶すゝの落葉も軒のうち　天籟

落る葉に松ちりくまじる松の嵐　千崖

隠る松の雪に中しや耳の穴　三夕

炭売の手先見せたる寒さかな　銀獅

水仙の花を拾ひ出る霰かな　雪思

水仙の清めたてたる日和かな　素林

捨舟の中や凍つく水の月　乙由

寒しさや柳ハ細くなりにけり　井晋

寒の暮[illegible]る山の姿かな　月峰

暮明に寺の松吹木枯し　苓美

松杉の上は冷しく木の葉かな　其成

雲鷹せまりし時
草の戸は蓑笠とこそ雪の人　林之竹

侘しさも初雪中ての山家かな　玉屑

雪に日残ともらでは嫁かな　嵐文

ゆきまてハ根くもう越し旅衆　路文

枯はてし梢の鳥の啼たてき　蒼虬

たつらひの花をそはその松は
　見勝さやゝし
生写ひけうぬらうなりの三豆男　在手
名月な花友らし
鳥岩山をしをまゆつにむや秋の絵　椿堂
紫撰をつんく頭ひとつ飾
浦乗も助すゝむを師をさき　北秀海寿月
孫香まて移しおなたる事のあれ　茂良
　華舎

蕎麦切と俳諧は京地水にあはぬといへる
翁の格言残あるに思ふに人を清くかゝる
ひとすちにのこし趣はむ津の爲りんな
添生続和歌と其の名くより湯やまの
物にほふて鮎蕎麦くの物好をまうけて
とゞ元との草庵もやうてあらし
今の新庵にかうつり語縁の花見を

朱雀の柳になびきて韻言乃変化
風騒のいそらしさまかのそへきりの風味
俳諧のたのしミ残たのしむ人の稀なる
をや梅此頃るしハ其すきとする
中のひとりなるべしさくに同好の
交誼厚ふして此巻序を需しに
慕ゆる蕉翁のおもむきを巻亭に

のぞまれしに其は身にあまりと云条の
難をいはんことハ我の恥るところ
なり出書をつけてまさにおもしろ
数華韻会ハそのつらん人く虚名す
多くのく遊子翁こつらら己ら拙す
ぬきしむ名氣多んりるべし筆も
と独言なき執のひと事なれんり

傳へむへきことも有りたく此道を
學ひしもの猶まよひて寸楮も
をとらすはことありつゝゆるし給へ

春隠

松硯序

まつか硯といふもの有けり
是ハ武隈の松か葛をものく
人称松かり寄留を撰り合の
路標和つら飛る寒きふ
ことするきのことあしとる
古人紙出青ろ考さ切ゝときて

あらしきすつましとすゝたるも
芭蕉翁ときに松嶋のあはれ
むかしから羅漢法師にハ
松ぞまありぬ

朱樹叟
士朗

松の硯

暮春の月影ハ二日三日かれ　信中飯田 蕉雨

雉深し野にまつりて花ほゝる　左詰

鳴牛や若葉かけハ松の下　壷伯

蚊よ一列てあつまりにかゝり夜の月　スハ 若人

かりそめの宿とかりあさくさき　玄光

茶室も萱の露となりにけり　砺杢

一日の茶ハ涼しほとゝきす　素緑

すゝしさやなのに松は今かり　上田 雲帯

き明に水鶏のりしらぬなかり　如毛

みしり程やせて出さるゝ蕎の穴　羅城
わさ鞍か番の捨女か圍むる　全

八巣石上飲

月の出ハきのふは河宇郷に　羅城
家のくるりは咲のこ殺忍　蕉雨
尾ハよ花村雨の名ところす　壺伯
人の椿をとりしに房る　城
蝿小かるゝ蘇も傳書を結ひやん　雨
三ッ示もなくれて急ぐふ日う　伯

笹葉にハあやあやとしに咲ちきれ　城
人里遠く秋の夜くる浪　雨
今の日ハ生綿の繰の有ル家　伯
数済ミすゝめる馬の鞍蓋　城
唐の戸を急の鏡に押うたし　雨
菊の御宮めも墓の二ッを　伯
盆の月露の揮子の私ひ　城
八声へ船を出すむかしの声　雨
大公の蓋を焦して走りぬ　伯
咲の子騎ぅ蘇海とりんそ　城
子桶に古き銭を結ひ付　雨

迷くとけくもれす　かゝる　伯
囚人に琵琶もちらす書院　城
障子の外ハ雲の甲斐ヶ根　雨
鎮めしまゝに鳥の仮枕　伯
一まとねつて無芸をうしる　城
稀にいうる鼻の先んやく日の暮て　雨
と挑むるゝ稀な超女二人　伯
植すつき本稲の小縁を蝙蝠め　城
隠りもを鉄風のうしろさ　雨
何も蘭も月夜とてぬきの八幡　伯
帷子持く立菱のまむしろ　城

公領を見えて八月九日かけ　雨
豆腐やれと南無焼きうれ　伯
まからからと唐まはしの茶屋まで　城
団扇ありしう刻して参りなり　雨
槙の霧はおきてぬ気を書つけて　伯
住かそつゝ池の水音　城
藪花の奥にあるき莚はる　雨
松のすりのにもつきてるかけかふ　伯

諏方湖上

ふり雨のまま出てりふしの山　羅城

さむく風の吹く草葉浪　素琢

明ぬれの門の戸を推と答へけて　城

人絶たへしの蔀張のうけ　琢

笛の音頼もしき尋ける篠簗　城

一畝にひく桃の葉しく　琢

手の指七ツの友の安ふみくて　城

併繋て作し枕指来る　琢

さまざ子寄あてしも那と恨もひ　城

宵やしの的とくはいてすめのいふ　琢

関の雪指く久しき枝ヶ庇　城

影くれむ、あつしもし　きより　琢

ますて広かし二人ヶ笛西吹ゝ人　城

蓉の家をとふ訪る戸の口　琢

月花の書も鍋の境に辛く　城

阿ちらゝちふ、向てい孫つむ　琢

都もかくの付ひつをなる欽悲文　城

いさますその日ヶなやむりしめく　琢

天明癸未の秋山裂雷霰撃く
人民盡の焦熱に死するもの數を

志ゝけなき雨そのわたと見ゆる

はこまかく柳黄なりある

淺緑としるゝ野に汗し

ありや入日てりつく淺みぬ　羅城

雪のくゝける夜の蒼き　雲帯

鞦韆に芦毛の馬の踊り出て　城

さつと涼しき荻の柳影　帯

晨明の雉子の宮却ひらき　城

雲に様さす沖の船　帯

浦たゆき名を磨のわれつりて　城

文に清くらん哀心の夢　帯

身のよさを兜の伽羅の蔫匂ひ　城

蕾のなさけ雪の日ぬ汚　帯

白牡丹門見えし様の名やしき　城

難波のきよりむかし吹風　帯

芒こいりぬ妹の居の軍家　城

花の添生も形の來る垂世　帯

深編のいるくさく名朧月　城

淡り去ふの喜ひ喜て春　帯

十石の社飯備いりて　如毛

都へ夜に出雲黄牛　城

真とわる太く風落似をの　帯

岩根をふみつく宮の座をひ給　毛

雨しめつき風は柳の香　城

たまきゆ襷の世をのがれね　常

ひの子ハ代脈坊と名付けり　毛

二脈つんくりと強る霰養の炒　城

霜の暮りより落葉松寂く　常

踊るしいのち中立の膝　毛

志のふ山の峰のむかしをしのひつ　城

机のうへに筆の飯をこ房　常

膝らまき局に霧の露ちりて　毛

ひきりに小袖おらる蕃鮮　城

翔綱の扇見すてを乞帰　常

石の蓋落の鵺ゆひくら　毛

三尺にたらぬ莢に家つもり　城

隣の男おさひに菜ある　常

鐵に世打をつぶ山刀　毛

いくつも系にふきの芽　城

雲箪の山藤に立出つ

りちに中霊りし光るのぞく

をるひかるり妙枕ハ帰路を

跡しらし戸隠芭蕉井家田を

孫く出る嶋の百花の華を
尋し入りして八月の空の
秋の相の古郷に帰らせ
給へ年すくに十月四日暮光ち
に八ツ入りぬ

妙楽菴　釋然

南無阿彌陀佛い結ちのうち月影　羅城
十船の宿も残せは喰く方　柵荘
船艇の菊さけ八尺寺も森雪の華も　五什
ぬき捨くきは雲の古机　左皐
水の色風の裏戸にかゝりけり　莫二

草の上に夏の白雲　希言
山伏を手引くるす女の寺　穠左
酒のうら絶えさえる朱拍　文兆
ひよれひしと砂の上かて魚を逃し　凡化
そりしき方へ向て鑓流る象　杜亭
痴癈郎を藪のあれこへ送りやり　荘
筆の両ちるの七夕の月　城
相つかふ秋の寝まかいくるま　皐
阿波の国待へと秋もふ綺也　什
拾ふ入ツ氷を籬に鳴せて　言
西の谷きて縁る橋の欄　二

出代ハ花に障らぬそのかまへ　兆
気をりけらく鶯鳴すあり　左
江をわたる人の後に雲はれて　亭
筆洗く凹の傍むしろ戸　化
獅子舞の手ふりそのを思ふ袖　城
世おもふ君は眉ハ落さし　荘
芦垣の一重も隣の花あらし　什
若紫杉のしら宿の軒に吹　皐
ほつしと鳥をねらふ竹して　二
俳き法も文をつゝ算よまる　言
川舟をさす汐時にわたらし　左

村のうらすりそらしく少し立　兆
雪ちる苗の色き霜か鋤の月　化
霧かゝし流るきぬの上帯　亭
りわきを橋姫の屋にかまへて　荘
瓶の花挿し井に蓋をする　城
中々に乞食の子のかしこさよ　什
日の入りくしの濱霧か傘　言
棹さすハ花を揚ける舟なるか　左
眠りさそへる神路春風　兆

寛政丁巳冬十月　羅城記

跋

ははきゝのふせやをたつねてその
はらをめぐり、つたかつらにからむい
のちのかけはしをわたり、みすゝか
るをきそう、すはしのふじ、きをとめ
かあないに、たごとをはすてさらしな
をさまよひよもしみつてらのひか

りに、こころをすゝしうして
ひとひとつゑりいたせるふみを、
ここにしるすきさらたのきさらは、
またおくつゆのくさはにあら
あもしとそり

玉之山姥書

玉くしけ集

いさと花婦綾衾に甲冑に桜ふゝきをま
さしめやしの紺衣に桜の姿健に又今の心を
まつ鉢冬を以て白図を人に病氣の晩勢松の
綾まてうよって房ら中しにて気のとは床しく
すまゐく鞍裏庵白居老人は甚古拙しもの
高岐橋ゝ多く様り紙畳つけて売りとも殺
たりけ十八日より朶卧してなお身まかりけ夜を頂と
菜治をゝも如し心入りゝあらちゝ松島の殺を
旅り坊と見ゝ十月都ゝ出足ゝて霜病し
社中八名三人つて墓参をなされ庵中に松雪ら

居たる間ゝあとの事ハせや重ニ是社中三四人
梅雲引添ひありしと思ひて其餘中のこし
十月二日の暮ニ辞句のなれハ雄渕ニ筆とらる下しを
たく霜のうへに重たり口吟み
とかくせて今日ハ雪ぬ聲もすきあし快き手
床の上ニ起きあかりて梅雲ニ句一句ゆりよれ
いまも絶たる梅雲傍ニ居事て筆を取ハ絶ハ
招きる先生の思ひニ自筆ニ志す事も下しとそ

七十七年の夢さめぬ是ハ
捨る身も終し

諸由く棘も篠も打なかり

寛政十二年庚申

とき事書ハ自筆ニ出納て自ら聞さても筆のき
出せさうしとて尽くしに床ニ方ゐひたるか中し
勞弟くそへ申し謙ニ筆讀りくしけに出米申ほ
さるを梅雲ハさうしきる年ふりて帰花にし
申し十月五日ニ朝雄渕稱江三曲といへる書を
枕もとに喚て示す棘の句を又案しくれハ
申不付是ハ秘して捨よとさ落死後ニ句の
入事もあるハ是句の間ニてとやすされたる
初ニ蓬中の事ありとも家ハ家ニ来ある
比布も悪るかりしに教年る一句さし奉り

やかて其年十月九日の庵にまくひなき往生を
遂られ申しは其身の覚悟社中誰〻
此度を最後と思ひきは心しみて
さすか別れを惜て出しまぬ者はなくは
九月廿七日の日に形様の俳諧も廿人
あまり集りて執勤申と也名に執筆にて有
明かれは遂しは文政五年は白國老人の追年
年号も終にのつくろひたまひし十月十一日
葉は提示の同所北山光國寺とや云へ葬送
執勤一七日も其之通りは最後寺中しは
社中百人余り送葬執送り庵はなくは

誰渕か引うつり申し常〻居る八第之事
ふつを社中吟味して江戸当居りにて
引うつりしものは宗匠花子も不来来て
雛形庵引続之方に相集中にあらは此事を
以ての老人の没後誰渕を句論社中一同
寫楽子鶏を祭ひ申しに如中佐竹を祭り
四十九日にも庵に来りて志のもの追善いと多き
以下庵に関余日覚し往復之事也広し
二月上旬中まて佐銀暮雨佐竜中八句論
東樹翁墨山翁木下梯追善の一句
佐句向てまし先つ八右為此名佐定めし

此ほとし以て

庚申

十月廿一日　　桃形菴

　　　　　　　　雄淵

暮雨菴臥央推

こゝに此旨を拙了と承

此をしるすのみ

十一月十三日　琵琶園興行

みちのくの山に流葉しれぬ　士朗

あまりしもはをくゝる冬の日　羅城

とつくとうくひすの寫綿を着せ　岳輅

流をもみぬる牟女を移　杉兄

衣卸へ軍まきしたる夏の月　桂五

殘をしらへくけりをとる　天老

引接る千鍾を風の樋をかや　少汝

梅雨の築かしら雲になる　魚堂

詠〻のたかみ都よしのゝ山　羅城
あはやといて矢を尋なし　士朗
かほ隠す人のせわり縁きて　東水
丁たちわかれ十六夜の雲　蕉水
つめしに水手嗅しく荻の声　松兄
いろ〳〵縁にまきし紬ゝ屑ゟ裏　岳輅
きのふにかふ様迎へに渉清を中にて　天老
湯油へ鶴ゐむ首坂の酒　桂五
咲まれ背廷もみくぬ松の陰　魚堂
田まりの鳴ハ数を数ヶ出家　少汝
こつそりと猿の念佛を鳴かれひ　士朗

色絹の御鏡一葉すゝめる　羅城
曙やけむまよふれの旅すまで　蕉水
うきあつ気く〳〵ハ松葉にて　東水
まそとはのそをかつき神の積　岳輅
伊東とらむるとしの関守　松兄
妨まし〳〵の浅生の法えつらる敷地　桂五
起りの裏をつゞしかまり　天老
筵の蔓をもを新て蝿をおねひ　少汝
千鍋儀を法ふる砂原　讃 魚堂
剃去年をきしむる二日月　岐 孤峨
去縁まつまは花く燈ゟ等閑　士朗

かゝりやと雑　柳もかけの茅葺ある　東求

琵琶の音にさそふ風の格子戸　菜求

あハいのち縮の黒の襟衣　岳陽

忌する亀の尾ゆるし出　松兄

古の花に見し世の名をや詠らん　桂五

雲居禅師の後のうたゝよ　天老

しられハ又すゝしき芭かれ　桂五

西はまて松もなきぬしくれかれ　諸六

しらさしや薮に一もとの峰雀　白図

川清らハすへて日和の時雨哉　蕎卯

志ら浪ハまつまても庵の席かな　青川

てらくしと大津絵ぬるしくれ哉　帯梅

しくれふる八日の河しもやき山家哉　十竹

八重雲のひらくなびきて時雨哉　延之

萩のあけもみねく夢むかし時雨　来山

見かへるハ山よ里山へしくれ　民情

かはしと夜半に入作のしくれかな　大年
志らされする夜に火をおく庵哉　嵐堂
鳥ひとつ立おくれたるしくれかな　周瑞
起かくの時雨もしらぬ菜畑哉　清と
しくれ来る松ハ杉ゝの峯哉　加つ
時雨してまたしき山の峯夜哉　雷洲
鴛鴨の沖へ立ぎりしくれ哉　昆明
山はしとの枯木にかゝるしくれかな　大蕪
一村の松ハりくれぬ志くれかな　布泉
雀の子ら物あふり取とく時雨哉　蔦井
婦風ハ耳に月に降しくれ一の東　也人

はるしと月ハ入さま時に時雨　蛙岑
十月も十日くれきもしくれ　方彩
蔓に依のきれしにすする時雨哉　卓池
まし里ある松ハ時雨の峯夜哉　東壽
秋の明ぬ先かしぐれのいろかき　蛙石
志ぐるゝや人に見るをたまき山の影　可仙
しむまきハ時雨つたる金哉　五雄
寂漠あを見るや志くれの東山　竹有
志られてハ降しまゝ夜ハ鳴らん哉　猪来
山寺にねてきく底そハ時雨かな　可暁
すはらをとうつりけり時雨哉　山郎

夜しくれに濡て鳴出ぬ小雀かな　五柏
あち鴨の群出る波のしくれかな　圃暁
はましくれ家いつのまに松まひかり　左雀
志くるゝや宿は松風杉の風　霜居
峯の戸ハ露繕ゑもたらぬ時雨哉　庭甫
粉菊やしくれの後のはつなき　李嶼
ひうひうと麻鳴峯のしくれかな　学人
むら松の梢も寒して時雨けり　空香
さきはうそしくれて暮くれ荻の声　蕉雨
山はるは草果家のたえぬしくれかな　岳峰
音もなきしうちも鳴ぬ秋しくれ　素琴

象芝庵松葉種植趣ハ夕しくれ　墨山
まなす手し萩やすゝきなり志くれ　少汝
はやいしや月をうしろのむら時雨　亜満

同十八日

棲葉下興行

起ふしの芒を隔てりかれ尾花　白岡
人たちうちも荒言の煙哉　大年
雲清る日は志くるゝものゝ命して　湖央
猫ぬくゝの膝をし驚け哉　祥英
夜うり墨をいうにひめぬらん　緒六

秋を閉たる錦ほし笑の折　橘良

梓の背くらひなかりて霰かり　竹有

雀を見ん風にあかくなりしか　延之

いはつま火のちらし残る細雨　昆明

清まよひくるを潜たちのうち　布泉

鳴神の雲の様子ちたしくる　士朗

猿うつ音ある居うほの残　白図

手にあるものの扣し流らしく　大年

ついと立り鳥のしろ清と　臥央

山うちの里を楠に龍ありき　緯英

赤小豆飯したく正月の月　語六

花ひらくさまハかくあれ伊勢講すれ　橘良

うほとて相手にたなみ川舟下り　竹有

川端に大臣の妻をうき居立て　延之

まやとし案し鏡開のうほ　昆明

まろくと真ての穀のしきらいめ　布泉

開ほつりにあみた来を纒し外里　士朗

ははふもまうさ志かを兎て泥濁ゑの橋　白図

ちとりうきうら山をしとさます　大年

緋しく牡丹の花ハ奈良にして　臥央

女ぬすむに人をやるなすり　緯英

むら雲の色むら末迄ニ海の里　語六

蛇籠よ水のむちうつ舞の流　橘良

十六夜の来ぬひかりたる芋のよ　卅有

松もしろかりし蔓の擂るゝ世　定之

大つ孫の鹿の影をおもしひ　昆明

朝日をまちむ市子のいちつき　布子

花過ぎて見にゆくこの金平爪きえて　士朗

桜花の借金をとやすめる母人　白岡

ちまいしてさうし桜も飽咲見れ　西浦

ときれてもくつひふ乃まる　卅有

夜ル霜もなくてかれけりすゝきかな　蘇徽

けふまでも風にうごくよ枯尾花　天老

咲かれの中にも枯るを見るかな　松兄

むら萌のよし寄るよ枯を見る　蒙氷

かるゝ程かれても月の招きかれ　英二

見る花よ枯るゝものゝ哀し枯尾花　方明

世わたりのまてにまされ露や雲ちぎれ　京山

何げなき風にしなるゝ尾花かな　玉江

松一本枯れはしのをはるの角　橘良

春をまちかれくのふ三毛のちまきかな　素兄

尾花枯て秋の露さへさひしき　扇洲
なまれかゝる霜に尾花根はなれ　魯堂
かれぐしの花をゟ露に咲や月の露　硯静
みる影に尾花枯て淋しかれとはな　きゝを
をはなかれゝし無御秋を嬉しかな　石光
かれしてをはなにこほれ雲かな　五道
尾花かれゝ枯つくぬも寂し　大魚
紀の海の波こそりなる枯尾花　木人
ひとつ家のいみくちきし枯尾花　伯輝
ひとところの花たる枯たる小藤かな　魚秋
枯尾花なひきて舟に乗りけり　古舟

雪のふるかしきまゝいたく枯る尾花　池如
雲の山のぬ程になれ見る花なれ　東水
帰りけるを枯てしまへる枯尾庵　松雨
柴垣やわか主人なきもかれ尾花　魯石
さゝくもなきれしさや家の枯尾花　花斗
川風やとめのも枯尾花　梅江
枯たちしたまゝにして雲かな影　挂静
うれをたゝなれるして夕日影　也しと
あらるの夢の雪さよ枯尾花　神秀
かれをたる一つ葉に余る川高ゝ影　梅園
枯くや尾花に扣る盃の月　蕎秋

荊もせく跡もしほきられは庵　菊人

讃の間もみえてふくらんて枯尾花　沙鴎

かれくにも終ぬ深山の茎あれ枯尾花　藤水

招き止た人のかれても兎ハかる有り　雋圭

籬は去る風にふく有り冬の花　尺底

寄るものの心に枯たる尾花哉　其洸

をれも冬の花東ハ海をへたてかれ　亀丘

埋まる蔭に枯るやうなり枯尾花　秋湖

田ならしや冬も花とみなから枯のこり　古絲

かれても冬花か其のむくらかな　魯堂

去年寺に鐘ハ有りしかれ冬の花　徐英

松るゝふし霧の竹やら枯尾花　桂堂

冬ざれ枯てふる露もかはりけり　士朗

枯尾花ちらしの骨となりたり　卧央

三日月集

西上人東下年あまりける千載集勅撰

有よし聞て上洛ありけるを定家卿法師

歌の事尋ければ勅撰の事ともかくも

はや披露して御耳も歎しく入まいらせと

いひける略定淡路ならしこやいひたりけるとこそ

なき人をそこハ尋しらるゝきのう書入ハ

ことなり要なしとしうつしたる沙汰にて

難かしの撰集の事わらゑ白圀かつて

撰集の沙汰あつまり十とを詳しくいひまし

すゝ云筆仙墨居る所君につゝ経

えらみしとおもへハ句をこふハむとなり
草稿なかハにしてまた余も其稿をみるに半ハの
志を継いて二三を補ふおそらくハ人の
きして余玉ふ帰せまゐらんことを

享和二年春二月

少汝

霰ハ色ハ宵のゆく人の袖知りて　萬仙
雲路駕を引ち続きたるやま　岳輅
三余路戸路蔭々を尋ね行き朝朗　聞毛
乃ち宮めもやうに見前る茄業　倈青
蔭奈き梅の花も宿志の杖　他郎
ねかハたゞ露の小路陽炎春　沙漠
夏の夜さむハあつしふきまゐし　茶雷
足利そめ及落葉とくらし　紀鳳
うけふをてわけハ焼ふ罷もなし　少汝
秋海棠の花さきかへる月　白圖
きらくと風ふきまよふ紅酒　羅城

躍崩しるゝことゝる長瀬　朗
屋つしてもとこやら坊主くさいや　青
ことのゝ隠しをきゝはらま　萬
菅笠な御杖もたしたむる旅　軽
太筆売りの出てたく縄の人　毛
うきも墨をまし涙にさゝ色かり　漠
山蛾すくに淡たちまちは乾　朗
雅留をうきしと別をむらん　圖
あるゝ波よせる荊蓼なる中　雷
畠なる塘をむしやうに追行き　鳳
陣屋の茶六ゝ仰して出る　汝

大家同な岩比貫渡を節かれん　朗
のし引むほに筆者む　城
男山家の葉の山菊白に乾し　萬
留まるゝをしつゝ上をかゝ玉乾り　軽
面の路ふ吐息清きたなつ気の座　毛
露かゝる絃知しまきかして　青
まゐ俗女泉家あるゝりの秋仕舞　郎
月なる柱場みしと古か露をりふ　朗
ふるしと桐織やすくねくよき桜　汝
又そのきさ和しの日和なりけり　鳳
背とある家花を集めて山櫻　圖

風雅とゝるは蛙ひろうか　漠

三日月

庵維の種まひにあひは三日の月　曉臺

數日や三日月ちきる川柳　他郎

鴫一羽横にきれたり三日の月　騏六

九うなるそのとハ見えた三日の月　蝸角

百舌は尾にゆれしたる三日月　岱青

三日月は草は露にもくもるらむ　閣毛

うた出は庵ゝに入なりみかの月　大阜

三日月集

臥園撰

花鳥をわしきとくのひたる古寺の名を象耽院とさくへ申紀むらしをを綫の二翁此寺に翹居して

よし有とあるかたあるしをあるを佩る三日の月

かくハなくめ出しまそり赤五条坊本見とゝいつなりかの吟を出りしかあまて三日月塚をとゝるん築ぬるそこえさく五十年のきまゝとゝめすゝ尾破藍本葉洞をとり猫狸てらり歯く尓人もむさまなりすゝろかれぬ

こゝに濱名の古寒ハ法華寺の信實長者
なりける上人の哉つゞきて廣前を
興し小堂仏生衣まなびけふいともふゝ
前の庭中に松柏古りてを坦なる
風色うし健をそゝく松霧に面
おこゝに庵き附るをや

天明六年冬十月二日興行

三日月にしむ似ても此よ二日月　士朗
四附うつりに夕くれの松　曉臺

夕霧に名を見出し定めん三日の月　白岡
三日月の袖に入りしと見ゆる乙南　乙如
三ヶ月は石山寺にありしかな　木人
三日月に餘候ま取ある湖ゝの文　巨川
宮過や宮人立し三日の月　松兄

附句　こゝろし

霧の内の物色ぬもをらし神附句　来山
志らきも月便つきし萩の枯葉かな　宇洋
しるくもとても月の出る小坂かな　五道

しくるゝや宿なき松風松の風　霜居

松たちわぬれたる雪そ袖附ぬ　江戸 一蕙

ふりこして来て家苗の附なか　大和 馮月

さかうし小嶋ふかしたる鳥の巣　斗入

こゝろ離しや小町か跪て幾世哉　岡崎 趙息

風や法と小なまてるむるまとめ　也人

こゝろしや家と落込音のやま　ノ丈 一之

かれあし　枯尾花

見るとなるなきふしもあるは枯尾花　草人

風吹尾花こえれてかゝて松に光　イナヘ 伯光

村雨もまかりこよ枯尾花　蘭水

うかれ頬に鳩とやるき下沸る草　エト 胡隼

枯ぬし飛ぶとりなかきも枯れ　[illegible] 許風

冬月　水鳥

しくるゝ雲に飛ちるされ雲もさ澄よ冬の月　李臺

冬の月うらしし人の木履かな　[illegible] 巴水

おもけなく松もきえかゝる冬の月　葛斎

横雲の家小むしろあなかし冬の月　[illegible] 武昌

淋しさを中までふきし出居に障子　啟甫

松原を飛るさり飛ふ鳴千鳥　花叙

雪　みそれ　霰

けさの雪や籬に鶯さへてさし為　春暁

かゝる白鷺斧のゆき飛かへり去り　重厚

雪ちらし海士か舟の舟溜　（越後）左琴

雪つむやふりきかとふに竹の奥　蘭屋

人に障子雪のゆふへの戸口かな　希言

掃ありて出嶋しらけて雪の宿　南陽

あまさの夜おもしろきおもしろき　庭甫

殿の業や野原家に雲に紫霞さし　梅間

ことさら雲るや城下春の大檀　春蛾

落葉　霜　氷　冬の鵆

戸口まで落葉ふりけり住居かな　（サツマ）窓巴

夕霧や落葉に渡るこえのもとし　（大ツ）亀梁

小男鹿のふるう出ても落葉かな　（一本松）冥也

見るからぬかりけり蔓ゆかな　大蘇

山鳥の身にこたへきりぬ霜東に　万岱

悲も船戸口何も皆川一ッ鳥　長齋

鳥が啼山のけハしき冬こもり　魯隠

冬木立　枯野　雉

おもそらやとちらも見えくも冬木立　（チハ）鶯岡

鶯が身を拾く里のうき野外　（スハ）青以

月も雪もこゝにこえしの嵐山　きを女

寒さ佐夕比てゐるに来りけり　杜石

はらゝやあらし雲の中り冬の夜　猪米

孔子盗跖一塵埃

鏡くもらぬ人をもやまて蓑みかゝや　成美

寛政四十一月八日興行

冬がれハいつまでも見えて静なり　白圖

日ハさ雉くしと森のまゝゑち　岱青

ろく麻ならで志のあとをくひ残て　士朗

皮葺このまゝ小松をとりしきし　徐英

椽にさ小ちる星をはなるゝ月の人　大阜

涼続ほつ更し字　鮭ぬ秋　昆明

まゝに添流がちる大寺は鷗　騏六

くけおちらかゝる中へかゝる松　圖

白襷土器の出るを手にもちて　青
顔見せを見まほし德忠弥　朗
書そめも二の町ハ有やたかれと　英
うくひすに似る家ときく里に　皐
あんこうもとおりのまゝなる晨朝よ　明
はつまうしハちらりきし宇治山のきり　六
秋寒き小籠のうつとかゝるなりけり　圖
なふしの方もけふ乗る七十　青
ちまきハこそ不断桜の寒さしらて　朗
砂に蓄ふき四月かんゐ　英
えしくしと塩のにかく鏡もすりかへ　皐

さの江小女郎とのいまもなお　明
膝にとかましかしこくて風の前　六
見かけなるのの菜畑をかたちみ哉　圖
うしき坂の社ひれひしき獅子哉　青
戸板渡しと隔る舟背戸来家　朗
杉もあいしたつねても抱い花　英
銀の海のかましく杉もしると　皐
帯とくおほえ夜にたうしる方程哉　明
秋たちも出まくみ破の夕暮　六
竹杖のふしも七つにまるる好月　圖
酒くむためのの塩磨なり　青

水於濱とこゝろもとめる淺井や　朗

鳥羽の千鳥を来てとる空なく　英

燕来る川に扇をかさす日のうつり　阜

かすみにうもれたる木に花の咲　明

きさらきさて小鳥こそ此たまかめにまち逢　六

余念もしる几帳の彩霞楼上　朗

歳旦

春きてハ春ハありけり奥山家

鈴路めのまにまる糞さへ掃ちまり　松本 冬花

うる雲のかしとあつまる濱のゑ
　いでます

門雲飾りより見出る鳥居ぶ　十州

元日ハうるし二日ハ却けしとし　文左

梅　柳　春水

辞梅あんやう次ぐうるさめ梅の花　計之

まつうるゑとの余ハ何ゟ梅の毛　十色

あわしハ澤と田子ハ咲きり梅の花　兆雲

梅と月とそ飾る名人はなりて　岳幹

ぬるうる行柳ハ青う芽ぶかり　百池

おほろくらや柳にしまひハやき底　吐牛

丹波にて
むまそふましうき世の出る雲の水　青阿

鶯　花

うくひすや家並の戸に聞も同じ　桂五
鶯の屋ねかわりし留守かな　巣兆
鶯や人のうき世を聞て居る　雄渕
うくひすのとしよる時分そ付茂む　北鳳
鶯の啼おほろをたとり杉もとの色　五雄

うくひすにまつくうかむ指作　遠州 琴波
花の雲見えひすの山ハ見えてほそりぬ　柳荘
月と日と花の中なりよし野山　大魚
春の日の長きも花のちりしかな　天老
とてもちる花なら月の影法師に　兵庫 呉来
ちる花にちしり付たる山家かな　物知
曙のちるよりしもにとめもなす　虎杖
月花の東ハむつましき風情かな　[illegible] 騏六
行く花をとめるや孫も客の内　方朔
牛の角花に落ぬもあはれなり　如毛
くさらせて若く気になる

人里ハ霞の奥なり山さくら　玉江

浅雪はあれとも花の咲らし山　文雲

さくらの日暮るとみし八山の陰　猿左

一とせを花の事しらめた櫻かな　草竜

すゝめなし日をたまりてゝと櫻哉　百扇

まさり夜の花のおしめよ遠浅かな　徐英

花二日旅ちに咲くそあたまに居　素郷

菜の花かりちるよ里おいふかり竜　樗堂

さくら咲てまるき松の木のあふ　椿堂

春夜　かすミ

春雨やしくしくの木に滴ふかり　蕉雨

はる雨の樋もきのふの河内ハ　双烏

うくひすに京都河より村色みあ春の雨　かつ女

春雨や竹しくしよりおくさて木の露に　松本真簑

朝まだき万歳村のあたりかな　大魯

すゝろ也　帰雁

とかしきにくもうかみ壹岸　エト一茶

薮うきもはうら沸しくみ董家　遅之

二窓と月と猿ぬきとの宿かな　布舟

なふハ来てきのよを雁の列を外　桂裏

雁久し月にきえ去れの朔雁外　関叟

春月　春風

をき急く花おすゝしよむるの月　魚堂

春の夜の月ふも雲のゝ里八行　上田 雲帯

よふく葉をふにしよのいふ守ゝ春の月　竜君

たひ能く世かふに春の廓形外　京 可董

春の月綾瀬能水ふうてしなり　川コヘ 菜波

ゆふ香てうきとねて出かり春の月　スハ 若人

炊ふそむし君帝も似てり春の月　上田 盧涯

くさしもまもと萌よりぬくしけるの月　葛井

加免能脊ふ住るる山ゆのり春の風　士峯

春風のあよ御しと江くしに々わ　柳涯

薮梅を饅を手り本ゝ家の風　卧央

雉子　暮春

けつ里出しふしきしすゝみ　東水

雉子るすく打ふし激のふとくる　射道

馬市のかるも家も見えて雉子の声　下ン本 喚之

象八春を惜むゝなしけぬり　福島 春唄

大雨に春ハのらく流りになれり　（八代）吐文

雁とんで浅のうつりもよし東山　双南

虫しなく夕やう治の川霧立さらば　墨山

雜

正月のあそこそめたる西齋ふ春　了閑

清霜に家鴨なきましし門の池　嵐外

登りくハ絶うあみりなりたるの山　（松本）可者

名とし ぬる宮とあるらん桜の花　（同）泉阿

宿とりて須磨も見に出し春日かな　（三州）幾久成

五将下ても田畑見るもとし春雨かな　（武二口本）定雅

菜の花のいつまで咲き松の霧　素外

さひしさはもめくつたのしき春の山　推巳

雨を吸る声ぐ桃の畑をへりゆる　一音

ふりきし日の浮やとこまでもすゞしほ　玉之

海つ風の舟もうきしき二月かな　渉鴎

正月の飛なこわ八人の松なりあめ　白圖

春比舊一陸ゆるくあらしになりけり　（松本）両曉

恋う魚の翁けハうとく水のいろ　（大坂）祖淳

神代よりかくるや藤の弁よし角　芳中

枇杷の花にふこわのかく桜垣根かな　（イセ）鹿明

風もまた寒し二月のあら男　五明

時鳥　卯花

暁のうれしきこゑのよたくお庭　良明

鳴ぬ日ハ渋団にするほとゝおほ　金鳳

ふとくさす芋の葉ひろく簾かな　イセ夕 蘭二

雲月の二度くしきしておとし給　イセ 杜影

ほとゝぎすきゝてきけハあまく水の音　上松 なつ女

日枝に雲引よせたるほとゝきす　白岡

卯花に鷺引かけてあらしかな　亜溪

けし　夕立　五月雨

ゆゝしさや梢をすつるちりもなし　長翠

来やとハあやめくゝもの五月かな　千當

五月雨によきたよりのハなしかな　魚秋

しらけしの清ゝより落る瀬の月　大坂 五寅

夕立にあらくて出て出る月夜哉　素檗

閑呼鳥　鵜舟

ほたる火　蚊屋

なくしては啼ても定めぬらん鳥　　桐栖

家志のふ宿かしむこゝにも　　六悟

人の来ぬうちてきさ蝸牛　　スハ 芸門

何そうれし二葉ふの芽をうふり　　同 呂理

流し井つくふう遠たる蝸牛　　四丼 入素

志ぶらしやみ食る覚さる乞食の子　　スハ 自徳

面雲や旅やり出しきかむ松の人　　八代 斗睡

短夜　夏月

あつの夜ハ扇の丸もなまりけりな　　蛙聞

みしか夜や三日待しても居の友　　松本 仙市

天神開眼

あらたなる光きさ夜るなり眼を開上　　エト 無説

何ある見よ秋ハ今のましに露白し　　宇六

短夜も生すていそかぬ山家かな　　仝 宗古

ふるさとへ行出るハ夜明月　　スハ 千丈

すゝしさに月ともいさぬ草の宿かな　　莫二

云ふせ川に宿

はし居ハ老しもまたく鳴る鶴　　青川

雜

夏乃日もかゝる淵ふ亀の頭ハしそ　野雀

竹の子尓これもかくて發する朝の露　（下野）阿彦

あらし蔵の卯月となりし山郭公　汝蘭

　高麗山尓のかゝりかな

積まかくし湖艇こゝ置しけの花　（下）文几

あすの夜竹もり雲の絶りけり　（越中）呉山

なく波や伊勢の田植の泪かな　五周

みしか夜やさしるゝたる竹の月　武陵

此頃しや顔も扇のかくしかし　濱藻

山尓おきとひゝるゝとも經

出けるゝ麻の道ハ分ぬひらきし　弥義

竹醉日

何か人するゝ號せる隱和尚の叢談を聞たるかに

としあるまし尓庫かくて此人一日草庵を

訪ひ來りて門ゝ四子あるゝ白隱の墨をとし

語などを畫かりとそかの和尚の禪を云ゝひ

白ふ今や過ぎしその禪を作まありかや事て

以よつそ是ゝとゝより禪味をしぬ知き也ハ

そ猿徒を飾くみもゆられゆくしげき夜比

ものゝことく竹の宮のことくまうでハ鐘撞のごとき

こゑのきゝきこゆるかたしけふそよぎめでたく

かよふなりとぞおもしハその花りしと松よふるは

ひとのこゝろなめりさまさまにひとむかしを

おこのたさとのさまたにふしてもおもひけりと

おもふおもかげし窓もさうよけふもさうよ

とてうゑつきぬりぬこの日竹酔日なるをハなや

ころおもしとおもふことをしるすおもひぬ

竹植るけやくもかゝすをたのむしひ　少汝

この日とふらひまかん〳〵の興

うゑてのく竹にかゝる古巣かな　白圀

あやめしくと葉のかるゝ竹を植る竜　魚坐

ある紙に植ゑけるぞ竹ハ松よりも好き　布泉

らしきまでの竹の根をはく端午　大阜

竹うゑるひるにききうとよきしく雨　天老

雨に植る竹ゆふりふをしくらへ雨ふり　卧央

竹うゑるとて又根にかゝる苔の露　士朗

おちこちのうゑる竹は一日の雨まつり　羅城

竹植て末の雨をまちけるかな　徐英

月影にそよそよと竹をうゑる竜　松兄

まだけ植て松ハ末ふかく気になり　方明

ゆふかり竹にやとるかたひら絲かな　岳輅

竹うゑてありつく寺の男かな　行脚 玉屑

山傍幽翠

すてられし紙衾や松風桐火桶　桂五

春のきかむ花の中乃丸家かな　騏六

夏月清蔭

墓うきし世の人をうらみすかりけり　千當

ひとりねるも八十のあまりけり夏の月　椿堂

清節凌秋

蘚なかゆふ色をむしる雀かな　青川

流れぬ社ゝ秋うまれしら菊ゑ　瑞馬

幽叢兔烟

八日月鷺の羽もふくあらしかり　成美

咲ゝ三や手梅ゝいまゝ月の山　芦丸

坂にありてや竹田のあさ往なり　自樂

虛心友石

石蕗の萬にも烟られける家かな　南陽

行かんのあくせにゆく雲の居所　猿左

湘中清心

水にきたる鷺をもちひけるもあさ鷺　平入

清晨帶露

すゞむしに朝のとかしくすゞ音　弁六

志つかさに雉子の尾をひく戸際　蕉雨
きのく音に盤うちふせるゆふべ哉　一草

清風高節

月かげにちりゆく花のあらしかな　素檗
名もなき菓をちりしと鳴き鶯かな　守國

露凝寒葉

志らぬ菊や松は常盤の附を切く　騏道
しら露にそのまゝひたすら月夜かな　可都里
ちつかしは紙屋の森をけぶるかな　（ミヤコ）双南

朝雲察翠

そのまゝ思扇ふらふら生れきまぎれ　同　其成

五月雨は水に乗かり浪のしき　魯隱

緑蔭連潮

さまくと芒穂に出る帆かな　柳荘
秋風の雨に吹くの音漁村かな　樗堂

移竹半濶

寺の人をちかうにみてや松の風　卓池
雨霽て松のくもりに入日かな　國瑞
家くにまつ紅て見る雲の中　宇洋

鳳枝吟月

ことしより来しの鏡へはこゝ中かな　白居
名も升に日を見る紀よまで蓋は切　艸竜

前両寒光

きりはやはふしおろしきて尾花に　友圀
樹の色なおすく峯もまばらしの雲　長斎
日の足ぬなりえんなり冬の海　景山

享和元秋七月廿五日興行

河浜魚をとり置ける小庵に　桂五
そのゝ端よりをしむ秋の日　少汝
月やあきあめやらぬ宵のあすらむ　羅城
嵐もわしるを流るぬ声しつ　魚先

手にまるくゝみもち捨たるうつせ貝　松兄
なをしく遠おかかりけるかり雁　大阜
嵩るみちうとなくにてもるさて　天老
ましう庭をつくる家の神酒の正月　玉江
吸さしの余流すゝ色たる麿くし　五雄
霜ふやあらむ水のしけ村雲　葛井
張まてゝし網のうへゆく鴨の声　橘良
鳥翔田は数の生ふるなり　嵐堂
蔦衣ふ草の浪の文字を引て　岳輅
あかるき居るゝうすもち　母　蘭屋
菜もはや菊の末ねまく日流て　方明

寒ゆるかしなる月乃ありあけ　居
雉子の尾尓露の絲をもち延　水
まさあんしや豔色の手まくら　間
脩脚の太口悪たなる酔尓　朗
傘さしかけたる雨のとまり史　五
樣蘘なし何とうつりし根穀譚　汝
いかりまかす屋尓かりてし葛紙筆　兄
白足袋ぬうらうらでゆき蘭氷　堂
琵琶をもらるとて様ふねこそ　老
松風の一身因からつくしく　江
すこしのひろ小ふえる子経響　雄

かくりしぶ尓夕飯ときハあなかしり　井
ふとまでらひおとく東たうる月　良
おし出る清曲の芒の尾ぬして　堂
黄葉の花とぬうつり御車　輅
蘂眉紙白よも折尓ふ老宴　厓
膝ふとくさしてあぐふる仮ふ　明
ちりかちハ新興ちの縫小動きけり　居
雲の海小出尓入なるよう猿　水
青梅の青き中より落ちりて　間
重ゐし小なみよの三漆　城

初秋　星夕　盆

鳥の聲松ハその中し秋立ぬ　越巣
ちる音ハ桐の木揺く秋子し　滄波
雁鳴や出えゆくみる空の河　可都里
夕暮や寄方にをりせて天河　壺伯
おかしよとのやすつに宿かる星むかへ　白圖
秋も宵おもしの舟かりしへにかな　紀鳳
世やかれて虫や名ぬる盆の月　以南
うらうら盆やいもか門火の夕嵐　秋國

朝皃　きゝ虫

いく秋の世を朝皃の松か枝　壬朗
咲ならひし朝かおあれしらずや　自楽
あさかほのひとへに咲て旭かな　（大坂）尺艾
葬や飯の湯気たつ手ゝ鐘鹿山　玉湖
砧うつ数のまよりも月秋の郷　蛙村
松風の音らなすりたり孝旅　ゆき女

蘭　菊　萩

香を好んて家まて辿る山路かな　月居

うく籬に家の菊ハこほれ花　（エト）祇徳

萩咲て萩ちるまても月ならぬ也　（サヘ）琴州

風の荒て八淋しからぬ萩の露　嵐堂

花かきくの好後にあらん萩すゝき　李閣

札済ては雨よきくの淀めりかな　（高）砕文

とのゝ家も見よつ形みり萩の月かな　卓池

仲丞の種好き芝まり萩のまかな　帯梂

小畠といふ山中を通りけるに麻の見くひき
りゝけうれてこゝしなるをこころちゝ

婦のやまきすゑ空けりき雨ふりて男の名に
かゝれる萩を折たれは其一枝を給ひて

萩の上に露も麻の香ちらけり　羅城

秋風　秋雲　芭

朔日や雨か飛ても秋のたせ　升六

人のかゝらい人ハ忘れすも秋の風　（エチコ）喜年

あき風の好み秋ハさひし峯の上　（上總）山皐

秋風のふきすゝし背の庭に　左雀

わひし軒を又吹わらす秋の風　嵐素

庭まけハ掃かて淋し秋の雲　（サカ）蒼虬

夕霧のけしきはり出ほ芒かな　瑞馬
風の尾花君か袖かたく吹まねぬ　子陳
露ありハ芒折りまけ夜ハ露　少汝
きく見しにも秋蝶
蘭庵のらし草高秋　如東
葉の枝ハ蝶ちつくろいんきらうし寸　さと女
胡蝶力に見え気かくらし頃の早菜哉ハ　祐呂
元井るのうへにまてるや秋の蝶　橘良
兎出し竹の芽すて秋や悩むらん
抑ろうハや花にとまる秋の蝶　白居
いつ迄の葉にかたとらくと渡る

雲ちはぬるも不里蔭あらん南より　仝

雜

露結ふらしすまヽにらきに糸包　乙二
志ら浜や秋の日永峰岩の露　一艸
八朔の梅まさに雨にうまきたし　方 文兆
人を見るく峰ゆり秋の山からし寸　瓜坊
稲妻や悩みくりしも今めし　葛三
鶯の花も葉もとりえて秋の暮　圃暁
二子のまくらし糸とよす
あくゆしなすき木槿垣根や落る　梅園

こゑかけて抱て鳴や秋の蟬　一炊菴

渋茶煮や清田のうつり乱れし　冥々

加くてこそ我ならぬ秋の山　硯静

尽

名月やはなしのごとく川むかへ　都貢

なふむく家のひろさよ秋の月　（サカイ）魚村

雲ふ流れそく廣かる月のけ乱ぶ　（尼）壽松

月すむや琵琶のおこりを拂ひける　周瑞

のちの月津ぞ八月の静なる　魚貫堂

こゝろあての松ハはつまる得つ月　宇曲

我秋ハ月と硯くしかいそかし紀　竹有

淀ハ水ふしミハ竹よ秋の月　古明

享和二年春二月

少湖補

名おし鳥集
春の日乃花の木かげにまとひ
秋乃月の紅葉の露にやどる
これ夏京ま むかしハ萬代も ありし
事ほしう詠にもおのづから
光起ありてことばいひそめ世あかり
自適に（いれあをひの ひとつさ）
不二乃山に見えて紀えの煙
あらし雲の心しき雲のたちく
すゑねやすて人のさしろふもといゑ
はくす畫き都ハ春秋ハさらし

夏の日の照つくにも余所
暇乃隙に登る事も唯此山践
又世ハ世の中の聞若ともに忘れ
猿ましき事もなくて静なれ
さしけれバ事済（こゝろあそびの一ツなり）
東坡居士乃最後をもれは寿十勢
いまにおもひ百年の生のしにあり
さてたのしみたるやまかしなり
桂乃木なれとおもひてき
菴のかうなにおもひとしやまる
しなり蓬窓もなく撰まむたらんは

けふ玉の緒も切るまものりり
子規ご（荒楚ひの事なり）
鶴の足なかくし鴨の脛短し
まましやその外の名なしし人のゆくへ家
名なし真実にも心はいふ
世の何事かも我は捨てたく
名所しく筆の跡

寛政八丙辰年

秋の遊ひ

雁啼やかくれて又見る天の川　可都里

月すゝき磯の秋をまつ帰て　士朗

朽ぬる宿の桂も蒼むらん　岱青

雨の衾のとるも惜しき　斗入

馬追てせり立らまし胡朗　岳輅

忘るといくつか狙の子　青

小松寺の細布の機織そこねら　朗

露ヶ嶺り好夕ゝはの中　輅

咲婦るは後ケ一茎錦そ　入

なら八七年あり山のさ那りぬ　朗

云ゝ秘密も色てもとよめんまで　青

夜涼き襟ずて豆腐切こむ　入

月の紀吹草折つも色になり　揺

雪踏にふむる揺布の会うし　青

蒲萄莚の庵さり形でも船の腹　朗

まれのさくりのときむらへも　絡

雨念と書乃揚とおなうみん　入

車なきうちに泣人も誰そ　朗

此雨を春のふ新雨と名付る　蟹守

ひら〳〵にはふる蔦松　鏡平
世の中を寺参する福の神　五芳
臼挽の所へ山の泊まる　里
釣針の曲ぬる人もつりかねて　平
棣棠ちりまへハ卯花煮飯　守
秋風乃白河まてハ程遠し　里
火吹竹をあけ方の月　芳
さまハこれぞ蕗又御法を忘れ　古
己か学きらし千鳥啼る　平
此節ハこれ無くさの冬ごもり　芳
二布緑しらぬ裏の檞本　里

吉日の次とハたらく日まて　平
あらし漬き汲ふ甑火耳なし　守
山鳥の尾呂ハ見をしとゝ向ひ　里
ありのの瘤ますて素手締たり　芳
文覚か取ちらしたる朝の淀　古
ゆるし日まりに萩の保ち帯る　平
鶯まとしや桁に居て秋るの川　漢甫

人のうへを流してくれな銀河　蕙涯

草菴

朝皃の秋ハ昔にかへり咲にけり　標冠

朝皃やむかしハ咲ても秋の色　嵐外

見定る事もなしや萩の露　芝義

尖るらくは秋を御しまぬ芭蕉哉　五芳

花芭蕉よけハ見ゆる戸口かな　長斎

きく/\の草の中よりすれ芭　英叙

木綾の名ハしと咲えし女

尾とまりての寺さとろる

安通むかし吾り終しる哉

ゆくゝしらり残るもゝまで

萎えてほかすてたる詠り女郎花　基貫

女郎花けふ由る草に交りけり　如毛

雄露縁や螺の内の草にゝ乗　梯丞

星遠し夕雲ハ晴る事となり　白黛

古き面縁の影にもうつる依盆か　政尾

夕風の吹定まりて秋の雲　常川

出渡く/\と松に障てし秋の声　自楽

月庭の枝寺鏡見る吾り

逢當をとるとて極楽樓にて鐘と

虫の音杖に心をとられけり　金英

きり〳〵す秋のこゝろを重ね庵　蘆堂

夕暗き尾花薄くしてこゝに庵　南九

初丁やうしろ淋しとおもふ夜に　石蘭

きの居に名合せする峠かな　三車

いなと南しゝ恋はき世中にして

袖ひとおもふもさりけりよ萱に庵　倭士

居ゆて寐たり都も人は津河の秋　其成

雅分して朝日出丸よ出よなり　仝丸

我老をそのろくおてふけ秋の風　重布

沖の小濤ゝ波のよるべなしと

縁なびし箱根路を越るとて

秋の海よるもはるく見ゆるなり　祥東

まんやあはのはしきせばゞ三日の月　素蘗

秋や只あすきゝの露萩かな　岱雪

都近居筆六身に添ふ月秋哉　羅城

よるは諸白き〳〵の寒と咏に庵　有丸

嵐雪が吟もきこゆる軒すゞし

裏表きゝんは白紙そ錦なる　陌洞

朝〳〵もつむ筆の気をとむ後かな　瓜坊

山残る尾花静に居れは草茂る　亡人　左好

此あたるえこひとつ経つるまその

ぬしはすゞしくあらぬ者なき

のむのあくまでまませんすゝきも
あら集

橋の実を啄ばみなるの雀かな　亀亭
降雨ないつ来たてしの秋ぞかし　雲帯
おもしろき雲の出て今秋の月　五深
何雲もとも鳥の飛ぶ有り秋の暮　方明
草の戸やたまつくる秋の暮　雪麓
その里へ小寄せつこて秋の暮　此波

寛政九丁巳年

春の撰

春の来は心乃あまるあしたかな　士朗
たとへていはゞ春の月人　可董
舟も出す山もましらや霞らん　静普
海まても平かに海ぬくとの道　捨来
蒲むしろ敷たまたまに春の雨　漢甫
鶯をあつめぶる本因の寺　芙洞
伊吹とハ十擢の名あるとし　里
剥きしゝ沙法の後ぬ夕暮　普
余春して漢瞿妻をなをしけて　来

慈あり滿しき菜の湯こゝろよき　甫
見えしく鳥のねまりる隅田川　洞
芝間の霧より門を出る月　来
幼のまゝぬ魂をも祭るなり　左岳
ゆかりのはりまへ六芦荊に行秋　里
笑の声と咲る植る家の水　甫
けふ川年に猿ヶ出来るなり　洞
長生をして青柳を唄ふ也　里
さくらの兎をのくれ人くし　岳
漣に家三井寺の新見えて　岳輅
大角豆つめよと頼られ帰　桂五

水付けるいかなる中の金衣蟹　古明
持ちえ比丸ヶ鏡のワリきしむ　朗
秋の丸うなる形と雪数ケ　欲青
拾なしくある口そとの杖　明
孫のみゝ算を左に指初て　朗
今雛くさ出せる肥後の角力取　青
案ぬし萩月あける月のあ　少海
水の上かもき星くれ帰　洛
小舟さし僧をやとや峰の秋　素
売木の家の一本涼しむる　朗
むかくと戸ぬるの行を打寄付　五

作田の空ゝ高う出て鵆うき　素

とのくゝと撞出る鐘の恨まで　朗

春雨と雨まで降るや八重小路　明

咲附て匂ひ桜を見付るや　素

何を粧る四五十乃鳥　汝

まんくゝと鶯来る裏の山　蟹守

うくひすの小すへつましたり垣の枝　猿左

鶯の飛ぶ猶ひ出む日さしの角　白図

うくひすや忘こつ小啼て二日来る　外六

新庵や梅さへ咲ぬハ菜の菜畠　阿茲

妻の後ゆか小添ふ乃ん籬春　無曲

月雪なかう着て梅の香ひ有　皀夕

坂ありの殿造り寝ざめ梅の花　貞松

木をさへも人声落し梅の月　遠元

葉あハ梅の香小抱てかやる月夜かな　伯先

病中

寝て居て小窓の見えてある柳かな　蕉雨

春の夢よく見て見て忘れたり　虎杖

五斗の静さかゝけあり二日月　露僊

正月も月の都とやまて妹よわり　菊羽

きさらぎやうゐした一人の若　騏道

夕暮や海なき国をもつ十方　花縣

垣をしらく急ぐ者りよ餅屋の声　天老

鄙くも見え水は蛙のさかり哉　蘭二

ちりつきの中うちむ藪の胡蝶かけ　丈左

とある山寺に詣て

蝶とまれ是そ仏の手にとまれ　捨来

松風もおしよ田ごしの菜の花　鹿吉

かくまでの春をとて鳩内にしも　少汝

馬刀ほりの細うしろ春のてくるゝ　方烏

山吹の花とへ垣ある菴哉ん　恭呂

荘子画賛

なまら飛ぶ蝶や菜の花に心なくて　二柳

春の人見も柳のゆかりかな　臥央

鞍を置も花の恵ありて人さり春の夕　可申

江に添ふて四里は桃の盛り哉　車大

おもしろき菴や桜にさびのつら　士朗

いかしさくらのとうよりかく

詠まれる都もりけるかしもうや

花の菴屯のうしろに絵ひろし　鳥語

奥山の茎ハ以上も萩清し　東隠

雲雲の滴や萩の春明かな　徐英

柱かくし

多こゝろ了陰ハ波あふくる

やうの鶴とゑし出つ何やふきやしと

みいはゆ真ふ十とせ余り隠ちなり

せん老汐の書揮のひしたまはく

一起しそれ出来る祥来侍るとき

ところ昭の句つけつらん　如し

うかゝひす嫁子の夕乃くの人やね
しく暁出たる峰となりしされ八
なれゑ風ゝ春のゝ涼しねりすましか
お然涼邸と覚らはありぬ

冬の頃拙ひ

おとろへし乃中よ壱つなき椿かな　闌更
冬の江ふ八鳥よすゝはき里　祥東
湖をに匂ひや洩れんねふらけ　可都里
月残る冬に麻赤の穂　鱒魚
そして波乃枝を一里に詠やり　六珈
いかに結りん寒柳哉　美敬
人こも鱗吟に胡八きりけて　臺珉
釘乃龍むる中庭の杉　里
うきねやりしまて流れなる菖蒲かな　夷
衣もひのことしる宵のむし哉　珈

霜枯るゝ鬼子を活るに花まなり　魚
気つこと渉らぬ伊勢の河上　珉
にほひある新茶罌をあけもせず　敬
秋照らし月力甚のあそびて夜すから　夷
寺の中に鞠を蹴ふ眼の光を　里
都をも迎ふる僧にあらし消へ　魚
網代木に笠ぬ丸の浮月の影　珈
寒さ浸のりて磨の蔦つたひ　敬
又あらしつき鶴の尾をおとしけり　珉
さしかに家紙の枝へとまりけれ　里
よき茶をなくしの花に咲て　夷

赤きを清くともなれの香よ　標冠
雛出る家鶏男ともわかちらし　奥
秋おしむひつを倦く一吹　珈
十月の雲八淋しき離るる川　敬
足袋をく人をならふも送りて　珉
人を捨ふ稀りひむかしく乗ふなり　南丸
つんる茂くま摘る茶生　夷
麦出し暖石の房のあはれそちに　里
情餘をを清をしゆゑあらん　魚
行取り気とりひより無語も通　冠
むしの声さし背店の山吹　敬

かつらきと足踏ゝのく義のあと　珈

落ほくゝと事素の少なき　九

むしとて来て二人ゝ戯やる筆の捻り　珉

障子のうちのゝふる酒事わ丸　冠

名もなし

不二を出し雲ゝより明る初日かな　恒丸

筆の采乃春ゝを迎なりけり二日月　春蛾

初暮に左く門ハ日暮て如時哉　玉屑

江村旅泊

暮もけり都かゝ年明の船しけり　紫蘿

とにかくに夜ハあけぬる旅衆衣　漫々

一押すし人の瀬戸ゆゑて轄と蝉りかな　都維雄

大根曳て松ハひともとなりかゝり　成美

気との鳴て千鳥鳴鐘と鉢叩　五貢

あちこちも時ゝする折わらへ小松原　如雪

むつましや千鳥ゝ中の三日月歟　一草

旅

紙衾一夜あしきの夢ちらて　月居

くゝかるて梅の蕾こさうし冬籠　董協

灯ともして人はねまつく冬の影　冥ゝ

静さは紀菴や杉風桐火桶　桂五

常盤木よりゆかりなき冬の月　菊溪

山里や包むことのなき冬の月　臺琅

小隠八山に隠るといふと

未形も家のはなれ急な冬の月　鮨魚

　　恵墓の里を過て

家杖にすがらしめたく晩中か　静良

こゝおもしや只白妙に一ゝ冬　罕叟

寒雲の吹つけられし枯薄かな　長翠

おろくと日影くもれる富士の山　竹有

晴る日の雲むらむら紀毎優よし　春鴻

よるの露月ハ紫ゝぞ菜はなり　柳莊

月影のふきしよそて冬ぞ　左岳

寛政十戊午年

夏乃わ揃ひ

竹の子やひと杖にかつく八重葎　暁臺

田植あるじの草履まで来なり　士朗

啼鳥多く山ほとゝぎす鳴て　岳輅

水濁るハすゝ手の跡　方明

手洗ふ朴の廣葉を吹かへし　休青
ぬかごの汁のおもしろき椀　梧
順礼者もたえて拾ふ形の森　朗
七夕星濃ちや陰り坐なれ　青
加茂川を西にうけつる夕景色　明
大工澤久の止む時もなし　朗
家鳩よ棲の巣を打拂い　梧
もえこと露に聞ぬ寝言葉　明
ちらくと當をもて來る月の影　青
楫おふ聲の渡口を鄰ます　梧
うけひきぬ人に恨やつくすらん　朗
尼寺ナれ今朝の便　塚　青
鶯にうら面は笠の荒界なれ　明
苔の露のとゝめかねるふ　朗
心ろされ逢き浪より藁を膚けき　梧
足跡拂ふ葉隠の僕　他　明
塩魚の伊豆ほか藩八山越而て　青
入日の方へ登る　胡態の雲　梧
殺氣よりむ木の葉の聲の高よ　朗
屋ゝふ人を遷し置　寺　青
湧出れ温泉の二筋ま流れ　明
雨紀風ゝく　歯の抜る月　朗

それこへり居るあるハつまでく世 洛
穂屋の芒を一束よしとや 明
麦洗ふ女もぬるゝ袖附あ 青
目晴て船越を見たる高嶺 蕪
橋り来を何ふたえん小袖捲 朗
仮乃侘居の浮名知れるし紀 素
子日なる松ま葉の愛まて袖て 吟
矢具山のとよし奈良坂のなし 朗
きゝは啼り来八一聲にまさけるを 移
袮ふむすひてその思ひ出し 明

丸がく

咲垂ゝきし萩の葉ゞ葉ふ 斗入
露きとめし葉々の上の月夜かな 鸞器
何にかのゝ露さてりし花葉々かな 友國
盃盤狼藉より
寅の霜に不足をわするまよ蜀魂 六珈
我上に啼わたりけりきゝれ 莫二
庵の戸をさして出れハ影に 壷伯
江鴫に捜ひて

ならし記す夜汐の引て静しく　何鳥
郭公ころきよるのくしきかな　岳洛
何の木よ河の心そ栗古鳥　の敬里
来ぬ約若よ画の哥き口によまよ鶯　五明
ことしら許や日枝の山風漣の音　杢兄
津く浪き身にみしら夜の葎窓　墨尚
久しく訪されけれ
標冠ゐりを舞鶏て
さ海くの華も見えし芥子畠　静菅
白帝のなしも見える小家かな　希言
採子虫いり雅るお歌も嘗なりけり　葛三

閑りさや柚の花こぼす一しきり　双鳥
夏の菊咲ちらけるに咲になり　巣兆
世にはなちらく松の葉に霜み月夜　紫暁
精霊やさらに笠合りして
露よりもわや鉄ひく人を影しかり　美敬
日盛中やらの泡から氷室山　孤山
名寒に勢見勢るの早川の紅
吟せんといふ人のあれハ之里
あまりの岨つたひそのほり
くもりそり撫笠すちし八
恵望草山路も捨す咲になり　真洞

青鷺の声の下なり淀八幡　百池

糟炊ひの邨ハ後ろ晴はかり　丈雪

人ならて舟ゟ関なり川まてく　定雅

月涼し秋ハなすこのかるもの、　棋價

夕立やとちらをかくも雲の蔭　一之

三井寺や霧出て見る雲の峯　昆明

なてしこは秋ちる紀跡を蛛はかり　鏡平

西行堂記事

尾張の国はよすきの郡を去る事一里はかり南春日井原にすへて木川あり西行渡と呼へるハ川の昔ふや西上人杖をとゝめしよしにて尾崎かられの菴を結ひみ川のうへし肖像を彫刻し給ふよしむかしの旅の歌なりとて今も古俗の口ふ傳ふ果ぞ郁ゟ浄まて西行堂を形神川流てゆりゝるもまゝく浩水のさ気をのうせぬ数百年の昔古の川下

木庵流し

ある江辺村といふところにて芭蕉翁泥中
よりの銅像を得たりしを猶取て
府下の史星季某ぬしを請得たまへり
それよりまた隠士白樵庵にあたへたまへり紙
帋為し生に依くて寂磨の末に有柴南の
今井庵に帰し并にこれを小牧なる卧雲叟
布毛和尚なりと請求給ふこの古像一字
を造立の志ありしが彼堂祠ハすたれて
葉田となり其地の営しなひたりしとて
今惟殊はじめ其あたり一の名園とし家
くさに建て閑地を卜しく安置しあり

批七級三ノ下四五

ゆゑを知る蓮華日井はしも八幡古くより
出しても翁の堂祠も得しつきの
なりけるなく満れなく社中祝誰
これよりも合ひこそ銭肖像なさしむ
まさらん僕が翁のこゝはまた茅舎を
訪ひ積をとる翁流を堀起て永く
よ人の光をとくあるなしとなり然
名然ハのよし今年来の事を得出

しるす

西行堂の新に

来るをまちかねく　士朗

木凪つゝ岩はおめしき麓から　得之

鳥の巣守のゑめい静まりし　大阜

有明の袖にかくる裏の風　五雄

笑の行燈のあつゝきかり　岳輅

ゆかり濃の染ゆく人の手をひろけ　秋挙

摘れ廣案にむしろ莚とる　柏亭

笠行の夏の侍るよ夜のまゝて　几咲

脊紫といふ集を書継く

山鳥祢しのかまひす鳴りやうつま　里有
哀の九堂戸の舩を押出す　可玄
旅はしとも寝るとの八ゝ分が萩かれ　士精
ぬれ色の傍となりみたる家　青虎
ひきまと居るゝ家君のぬる子やお老　杜月
滝のひゞきはうらし客の蓋　淇石
世の中の事にかゝる花の持ちなる　鹿野
妻の雀のなかしむ　竹し　草之　滑龍
物狂ひ霞の衣を眉まつけ　芝
四条の辻を一飛まゆ　朗
まつくと離れのかくる馬の糞　雄

家根の芒番の草かなしたるしけり　阜
思ひつけまも梅ちて中の月の袖や　峯
痛の鬢蔵のなりく甲斐なき　格
鶯のゆり落葉にさける夜し　咲
襟よ袂ふきふきかふ　鵜　亭
夜寒に二度角に隣の牛し　玄
谷越かよ出し木の舎の軒　有
降か川人をか炬よ気おりて　虎
降る雨と落る柿の寂しき　精
皆ともの志んかをり　鰈俵　石
御膳を清る涯の錺　月

松風の白髪をふりさはて　竜
あらたらしく耳を撫ふ　野
たゝら踏む一日〳〵の峯の雲　朗
水溜のはたゝ股引手洗く　芝
人の顔は花よりも旅の空　松
六百年の縁のうけ語らふ　亭

士朗　三
得芝　三　大阜　二
五雄　二　岳輅　三
秋挙　二　柏亭　三

几咲　二　里有　二
可玄　二　士精　二
青虎　三　杜月　二
淇石　二　庶野　二
潜竜　二

士朗

いなごの這ふ道までも見えて寒さの秋　得芝

頬の小へしり蕎麦の宿　柏亭

月の雲一ふき鶴まち帰けて　朗

かつらの髭きし鳥を追つる　芝

松風のとりもあかさぬ露らち　亭

酸茎をつまむしきはらまの来　朗

桶と申もの金生を見せしと聞てし　芝

いつか成さる身とも東へきし　亭

よもすから簾をとの字小笠水

古人いくゝの世や蒲つらん　朗
峯の雲とゝきて高きに登り　芝
半日を極ふ星待の影　亭
夕暮に二百の鐘をならしけれ　朗
箕手に乗し柳庭番の寒　芝
泰然とついく出かけて帰り鳥　亭
常もむすまぬき野々の岩　朗
花の色年頃は野分あらふらく　芝
ひし見埋たる土蔵柳のうけ　亭
虎杖は口なすゝ噛むよあれ　朗
若鮎を洗ふ水のうれしき　芝
見る度に動くやうなる新土山　亭
亀とりしとふちなりしり咲　朗
戯女の姿にかゝふ恨る嫉さ　芝
なうらくのつらふるの難盤　亭
とあつしに御膳を結る少し嵐　朗
柿に殺寝ふする妓王ちの庭　芝
踊子の見かえりと肩にかけ出かけき　亭
みのむし咲く氣の翔くある　朗
世の中のさうを井戸田の叔母也　芝
竹のすゝ先八西ふさあり素家　亭
明燈の事く懐に入りけり平　朗

琵琶湖見ぬ身を見ふハ淋しし　芝
眠りとのと猿をうつふきて　亭
尖ハ萄ヶ原乃暮残り寸　々
蕣花に鳴けれときにし　朗
枸杞の葉むしる菴の夕暮　芝

さくら咲て夢は結日ハあかり昼　イセ 椿堂
翔る子のうへ霧の蒼のなま　大ツ 千影
大空に松をはらふほとゝきす　近江 竃山
雪はれくみゆる赤木小家哉　梅閭
山寺やいろつきそめし蔦ふとん　卓池
大よくは花となる日の菊自かな　岳将
野の花に暮細り大堰川　黄山
一搆も暮すぎ水ハあかりかな　十六 米彦
夕顔まてもみれるに芒ハ身の字　竹有

朝〳〵来ていも鶯の杜宇　竹趣

雲影や浪にかさなる雲の月　野喬

むら雲は雲迄ふくしも菊の色　（十六）万和

家桜をうきあかくもりや聯句　秋挙

淀る杜の空ハ嗜の嵐かな　珉屋

まとく笑ぬうちに散ぬや山桜　（イセ）翠川

芳花やとまへ出ありく菴の犬　（十二八）長升

松ハ常盤しくの窓の桜かな　松菊

竹はしらよみもすまさり窓の月　松菴

いさよひやうけ流かりたる山の上　（ミカハ）梅堂

出る月を拾ひて見る山の上　可竹

春の夜ハ春に酒に身この斜なり　（ミノ）千阿

その事けすらてひとく桜かな　李臺

高藪やすこしたまれく蔓の月　其白

かくらしの声くもり窗の開あり　五道

深山木に隠れも寒りてかんこ鳥　卓允

身を寄てもあハわきとも秋の暮　（京）茂良

いさよひの月に恋をとり寂なり　鹿野

花嵐きらく光かする古寺の霜　大阜

蝶挿にやぶうらひすと担ひなり　園暁

錦巾未ぬよもわ老ハ絹老なり　（ミセ）稚巳

松尾でけくも色ある玄郎の門　孔阜

墨ゝ面白も志けりて揺そ花の上　（丸子）来耜
霞花のよしの香出る気合ばかり　野秀
小鳥しもさくらの中ハ淋しいか　鐵呂
花の夢や山ハ朧左様の思ひもの　（ハりま）田實
花ハ花の常と知もへとあんとも　萬舛
人よみなとふ折ゝ花の木かげ哉　（京）柏亭

栽草辞　朱樹叟

枇杷園はむさし川のうちなるその一隅
秋萩女郎花猫はぎはさらなり梅
をもはじめ此処をかしこれぞ季の稲
六ツ七ツのうちなびくのみ川
かくしきゝもあらそふ根ごとに植
そりをいふすゝきのりをたゝふ
さ波なるゆゑくもさ波やなりしを
うつろしいと嬉しきゝ漸あんなれ
この山路千草くゆやう通ふらし　此

しら露伊勢路山の東にも又きさらきの
孫も孫もこひ出しき高きあつまかし
うすむ子の花を出しふさかしの杖も
ふくらかやうきかりさまてゆる潤そ
あらきなる

落ちる里て一葉もぬ音の聲　近江 砂丈

秋の丁や雲にぬれたる伊勢山　イセ 省我

川さむし雛中にも丁ハ川田ぶ　国水

春雨の日もまして高き櫻かな　其卜 子當

さくらのちるしてゐるとまりけり　駿六

加茂川へ流れて出たり雨の花　吐山

行春の戸口にたそり角力取　其 竹外

湖水をうき出しかりかりすまひとり　太 宇洋

秋風や寺ゆへ見えぬ山のれた　大蕉

春風や松見えぬまりそ瀬田泊　餘祥

名桜の花ちりかけり雛の髪　三ツ 月巣

菊の盞ちきハ雛のいつら良　芳水

住ましいすとよ似して初とまれ　ミチ 作亭

ぬくきは佛も生れ給ひけり　梅洲

はらふとぬくふ初とけし生まぬもも沙　サツ 琴州

あの山は拂さく称晴の部　凡咲

猫の妻ながめて居る垣根かな　（ミカハ）鶯亭
をとの心に猫とハ志らて啼もせり　（ミノ）楚雀
昔は何かハ菊営の中うれ　（ミカハ）和楽
多まかの見えし宮居の清水かな　（イセ）暁浦
梢にも花をさかせもひろく山櫻　秋国
きのふなふ初音きたの末も櫻かな　湖風
花露出り蝶ものいそぬ有りし　浦且
なよなよと翔りし蝶の空さまき　杜農
父母の膝元ふ居てしらふの月　（シナ）蕉雨
ほのみなりや南手ふ物を拾ひかゝ　田江
三日月なと何處へもやる芭蕉　氷扇

名月や影もなかしすぬ萩芒　平扇
まゝうたゝ月やこぼれて萩の花　周瑞
菴を出れば神もさ暮る芒かな　（シナ）素檗
夕立のあとをも山家の宿りかな　啓甫
夕ぐれの竹の夕飯くれにけり　草人
西に暮る何りきくハ松風秋の風　（モ）李東
ふるさとや碪のぬしたる秋の風　九岳
鴨の啼水に影さす榎かれ　金陵
初雪や雀もまちし門の口　五雄
何とせそ梅折捨る山の奥　素剛
梅の香まもれて出る月夜ふ　朱月

枯尾花ひしと霜にぬれまよ兎　（イセ）雀鳴

枯芦を葉よ焚雲の日られ〳〵　槿雀

墨の香の森かなも得る蛙に　硯静

行春や瀬よ人まちかくつゝし　青兜

山吹や水の雲もつゝ〳〵し　求己

山畑やひより立たる雛頭花　午凡

小夜ふかう蛍の影も泣工の声　可玄

朝清淡ほとよ八家ハ寒くかす　月底

岩乍とかるく年て唱浮雲に　（畜）拾葉

海老活し信濃よ入や手の暑　常梅

朝くや雛の鍵仕る雀の子　沙鴎

寄ひくや餅て足継く雛の丈　宇梅

門跡く音ふも蓮を情とり　大蒿

畔やまきく粟の門口や麻畑　（大ツ）五来

流出ねる子ら柳あら嬉しさ　里有

空鮭よ味のかるく絶ゆ気なれ　（ここカ）佳雄

啼ちハすとのふもおしなさけず　（三士）柳荘

雛子啼や去の燒を雲ねの声　杜月

朝くよせ新も野ホ子日ろ　梅葉

涼風よ出る寄良の佛達　橘光

林の中く草ふさく段多　萱井

名りや神よお知るく草の庵　滄竜

水鳥の夜ふすまよ鴫の海　康更

みしか日の薮より日の入にけれ　雪封

あのころしき咲きた侘めや彦山家　淇石

大佛の屋根に年とる雀かな　士精

櫻井が里まて

旅人は懐ひし参りぬ花のかけ　得芝

神寄て阿りける名もなき山櫻し　希言

知らぬ茶の香ハ沸しきよもぎ　桂五

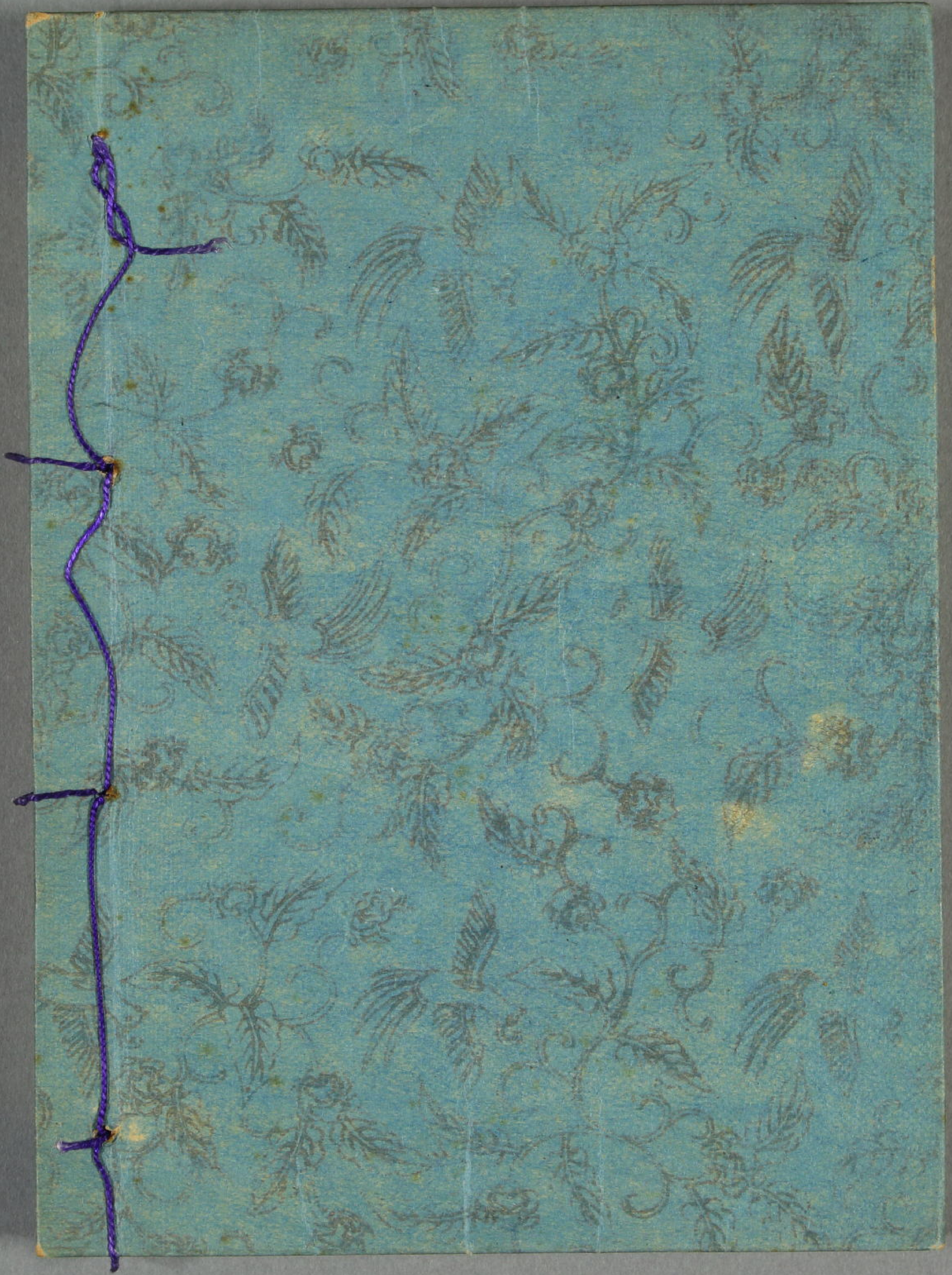
跋

老人宇薪既ニ乞得於像ヲ本光精舎令嗣子得芝ヲ造リ堂ヲ于園中ニ引キ水ヲ植樹ヲ以テ為流憩之所ト先生携ヘ諸子ヲ遊此堂ニ聊カ娯ム一日之余閑ヲ作彼詠次韻歌所一讃ヲ吾徒欲ス梓ニ行ヒ以テ揚ント之人々嘆ス焉ヲ示其中ニ于其ニ因テ題シテ曰ク本所蹤蹟集ト冀クハ萬方之騒士争テ有ル擯棄之賜則可ト以テ報ス

造堂之筆二手

増補

古蹟

枕七號三之五十八